理事長登壇 ③



神奈川県実業団連盟理事長
泉　正明
（日本発条勤務）

打合せから帰って来ると社の女の子が「泉さんはリジチョーですか」と問いかけた。先刻そんな電話があったらしいが、何のことやら要領を得ない。そして数時間後、編集部からあらためての電話があり、事情が判った。日本協会の機関誌「ハンドボール」で理事長と名のつく人の話をきく連載をしている。ついては神奈川実業団連盟の理事長の原稿を欲しいが、誰がしているかというのがその電話の目的で、今更逃げかくれできぬ小生は非常に困惑したのである。一年も前なら少しは胸も張れたのに、全く低調な活動しかしていない最近であってみれば、連盟の用務員をもって任じる小生もこみ上げる自責の念に手に持つペンが一屯ほどに感じられる。

さて、実業団チームにとって最大の泣きどころはということだが、やはり時間をあげなくてはならないだろう。練習する時間どころか、ゲームをする時間の捻出も難しいのが現状である。夜、昼の二直制、会社によっては三直制のところもある。そして不規則な休日と公出、残業とくれば、散らばっている部員たちを一カ所に集めることさえ容易なわざではない。

ひとつ会社にいるからまとまりやすいでしょうねとよく言われるが、これを裏返して考えれば、まとまればまとまるほどよく目立ち、それが抜ければ、まわりの人の迷惑することもより大になる。練習はともかく、公式試合ぐらいは会社の休日とぶつかって欲しいと試合連絡の封を切りながら切なく願う。

会社だってダテにサラリーを払っているわけでないし、今のハンドボールに対する社会の評価からすれば、ベスト4に入っても宣伝効果などゼロに等しく、いわんや他のチームにおいておや。会社は部員のハンドボールに対する熱意を認めてできるだけの援助をしてくれるが、それ以外のなにものでもない。よく実業団チームは金とヒマがあっていいですねといわれることも多く、それが案外中央の役員の方であることが多いが、実情はこの通りである。

ただ実業団の場合は、会社の名前をかかげてゲームすることが通常で、精神的なまとまりは、学生チームと同じものがあるだろう。しかし、彼らはハンドボールの大会に勝って社名をあげようなどとは少しも考えてはいない。チームの責任者にとっては少々頭の痛いことであるが、ここはやはり彼らのハンドボールへの情熱を買ってやるべきだろう。

ところで、状勢は非常に苦しく、クラブチームとまさるとも劣らぬ状況にあるが、将来への希望、可能性は大きい。いまわが国で大きな問題となりつつある週休2日制がその第一である。この傾向は間違いなく進行するだろうし、そうなると休暇の過ごし方ということがいやおうなしにクローズアップされる。一方、日本の社会構造をみるとき、会社単位の社会行動様式が一般的であって、これがそう急激に変化するものとは思えない。この二つの線の交点に何があるかといえば、強弱ということは別として実業団チームの大発展の可能性大ということだ。今神奈川には6チームしかないが、これが100チームになっても少しも不思議でないということだ。

この夢が実現するためには中間項がいくつもあり、そのためには全ハンドボール人に協力をお願いするしかないと思う。全国に散らばっている経験者がその勤めている会社でチームづくりをして貰いそれを各協会がバックアップしてもらうということがその一つ。

こういう言い方をすると、実業団の発展即ハンドボールの発展ということになり、大風呂敷だと批判を浴びそうだ。しかし、それには小生なりの理由がある。マクロ的にみると、次の発展の中心になるのは実業団で、最終的にはクラブチームが中心となるのだという気持が根底にある。もちろん、クラブといっても現在のクラブチーム的なものでなく、もっとオープンでだれが行ってもハンドボールを楽しめるような組織を持っているクラブを言うのである。そんなクラブについて語るつもりがとんでもない方向へ行ってしまった。しかし、地方の実連において上へ向うより横へ広がることの方が大切であり、そのためには現実をふまえねばならず、その上で希望を語ることが大切だと思い、駄弁を話させてもらった。貴重な紙面を下さった編集部にお礼を申し上げ反論を期待してペンを置く。

「ハンドボール」

1・2月号（第105号）目次

【表紙写真】　全日本総合初優勝の東京重機チーム
【撮影・山田真市】

全日本女子監督に井氏決まる

アジア予選候補選手20名も発表

日本協会は1月21日の全国評議員会、同理事会で今春4月の第5回世界女子選手権アジア予選に出場する第一次候補選手20名（GK3、FP17）を決め発表した。

また、注目の女子ナショナルチームの新しいコーチングスタッフについても協議が行われ、監督に井薫氏（日本協会技術指導委員、大洋デパート監督、中大出）を決定、このほかアジア予選のコーチングスタッフとして池田鉄哉（日本協会技術指導委員、日本ビクター監督）、鈴木義男（同、田村紡監督）、藤原侑（同、日体大女子監督）の3コーチも推せんされた。

世界選手権出場の場合の団長と井監督をアシストするコーチなどについては氏名、人数とも未定である。

アジア予選候補選手は予想どおり「47年度ナショナル」（本誌103号参照）のなかからピックアップされた。

前回の世界選手権（46年12月、オランダ）後、1年余しか経っていず、しかも予選まで100日ないという時点であり「即戦力」中心のリストアップは順当といえよう。

前回の代表から枝尾、渡辺、三宅（以上大洋デパート）、寺尾（現姓・万野、大崎電気—美和ク）三浦（大崎電気）、滝口（東京重機）、北岡（愛知教員ク）の7選手が姿を消したが北岡を除いてはいずれも今シーズン第一線を退いてナショナルのリストからもはずされており、この分、谷沢（日本ビクター）、鳥居（ブラザー工業）ら将来を期待されるホープや日体大トリオが進出したといってよい

井監督らコーチングスタッフはこのメンバーによって3月の第2次合宿を行うか、第1次合宿（1月21～25日・東京）の結果でアジア予選出場の16名（GK3、FP3の予定）にしぼってしまうかを近日中に決めるという。

なお、世界選手権の出場権を得た場合の代表選手については人数などまったく白紙だが、アジア予選代表選手に若干名をプラスした「世界選手権第一次候補選手」が4月下旬に発表されそうだ。

世界女子選手権 アジア予選第1次候補選手

▽GK

小原　名苗	（24．大洋デパート）	⑧	163
和田　祥子	（20．大崎電気）		167
大工原和子	（21．日体大4年）		162

▽FP

垂水　秀代	（24．大洋デパート）	⑧	163
米　恵美子	（24．大洋デパート）	⑧	161
島田　夏枝	（22．大洋デパート）	⑧	164
蔵田　照美	（22．大洋デパート）		163
古佐原ひろ子	（22．東京重機）	⑧	153
牧野　涼子	（23．東京重機）	⑧	162
葛西　則子	（21．東京重機）		162
市川　千晴	（21．東京重機）		159
池田二三恵	（25．日本ビクター）		167
谷沢　竜子	（20．日本ビクター）		164
三毛　直子	（23．田村紡）	⑧	164
辻　敏子	（21．田村紡）		153
嶋田ひろみ	（21．日体大4年）		153
木村　正子	（22．日体大4年）		159
佐藤あや子	（21．大崎電気）		167
岩井　悦子	（21．大崎電気）		157
鳥居　君子	（19．ブラザー工業）		162

○内数字は公式国際試合出場回数
右側の数字は身長cm

初めて「現場」からの監督

注目の監督には前回のコーチ・井薫氏が決まった。原案作成まで技術指導部では昨年11月以降再三の話し合いを行っており、12月になって「井監督」にまとまったもの

これまで女子のナショナルチーム監督は女子特有の問題と実業団間の思惑をさけるため日本協会技術畑から高嶋冽氏（第2、第3回世界選手権）、小袋是郎氏（流会した第4回世界選手権）、山田計氏（一昨年の第4回世界選手権）らが推されつとめていた。

しかし、こうした日本協会の姿勢に近年再検討を望む声が強くなり、特にトップチームの指導者たちにとって〝現場〟からの監督推せんは宿願といえた。画期的な人事ともいえるが、実業団—企業という背景をもつ井氏が〝初代〟としてどのような手腕をみせるか、一つの興味だ。なお、井監督の任期は一応、世界選手権（12月）終了までとされている。

コーチングスタッフについては井監督の意向を主にした人選が勝技術指導部長から常務理事会へ報告されたものである。

藤原コーチは主として体力強化面のトレーナー的立ち場で、鈴木コーチはアジア予選ではマネジャーを兼ねることに決まった。

本大会 第5回世界女子選手権は**12月** は当初、今秋11月21日から30日までと発表されたが、その後12月7日から16日までの10日間に変更された。

4月14日大阪、12日東京で

日本対韓国女子の2試合

世界選手権アジア予選開催か

世界女子選手権のアジア予選は2試合とも日本で行われる公算が強くなった――日本協会は国際ハンドボール連盟（IHF）の指示にもとずき日本・韓国戦を4月15日までに両国で1試合ずつ行うよう準備を進めていたが、昨年12月上旬訪韓した渡辺副会長（IHF理事）の話や、韓国球界の動向に詳しい人たちの情報などを総合して、いぜんソウルには国際規格（40m×20m）のコートをもち、充分な観客収容能力をととのえた体育館がなく、ソウル以外の場所での開催も難しいのではないかと判断、日本側で2試合を行うことを12月の月例常務理事会で申し合せるとともに、韓国側の意向を早急に問いただすことになった。

1月25日現在韓国協会からこの件に関する確答はないが、日本協会は予選期限が定められていることで昨年末からすでに下準備に入り、まず日程を4月12〜15日とし、開催地については第一候補に九州地区をあげた。しかし九州協会は12月の代表者会議（理事会）で協議の結果ことわり、日本協会はオリンピックアジア予選（46年9月）の実績をもつ東京、大阪、名古屋のうち2都市にしぼり4月14日大阪市中央体育館での実施を確定、名古屋（愛知協会）の見送りから12日東京体育館での第1戦が決まった。

1月21日の全国評議員会、同理事会でも日本での2試合引きうけを承認した。

今後の問題としてはIHFがあくまでホーム・アンド・アウェー（互いの国で一試合ずつ）を望んでいることと、韓国側の意向を確認することが残されているが、日本での2試合開催は動かないものとみられる。なお、日本協会では、もし韓国が1試合の実施を申し入れて来た場合は4月14日大阪で1試合を行い東京での試合を取り消す意向である。

審判は日韓混成を希望

このほか同予選のレフェリーについて、日本協会はわずか2試合のためヨーロッパからわざわざ招へいするのは経済的に不合理だとし、日韓両国推せんの国際審判員で運行できるようIHFへ働きかけることにした。また、IHF代表（ウイットネス）はアジア地域からIHF代表となった渡辺副会長がつとめる予定。

荒川理事長の話　あくまでホーム・アンド・アウェーが原則なのだから2試合日本開催は好ましいものではない。しかし、韓国へ遠征して国際規格よりせまいコートで試合を行うことはできない。

男子もアジア予選か

IHFはこのほど来年2月28日か3月10日まで東ドイツで開く第8回世界男子選手権の出場国について発表した。

それによると本大会への参加は16ケ国でミュンヘンオリンピックの上位8ケ国（ユーゴ、チェコ、ルーマニア、東ドイツ、西ドイツ、スウェーデン、ソビエト、ハンガリー）は推せん国として出場が決定、残る8ケ国はヨーロッパ5、アジア、アメリカ、アフリカ各1に振り分けられる。予選は今年10月15日から来年の1月15日までに終了するように指示された。日本協会ではアジア予選はさけられないとみている。参加申しこみ国などは2月中旬発表の予定

″オリンピック代表を推せん″

★日本スポーツ賞

日本協会は12月の月例常務理事会で第23回日本スポーツ賞ハンドボール部門推せん（読売新聞社制定）として史上初のオリンピック代表チーム＝近森克彦コーチ兼選手ら12名＝を決めた。表彰式は1月20日東京で行われた。

3月に初合宿

全日本ジュニア

日本協会技術指導部は県案の全日本ジュニア（ヤング・ナショナル）の初合宿を3月4日から8日までの5日間、東京の日本青少年総合センターで行うことに決めた。

また、先に発表したメンバーのうち菅広明選手(FP・湧永薬品)はすでに年令制限（22才）をこえていたためリストからはずされ、新たに藤井康之選手（FP・湧永薬品、177cm）が追加された。氏名未発表の中学3年生については今後検討を進めていく。

訂正　日本協会は全日本ジュニア・佐藤恭政選手（中大付高）の学年を3年と発表＝本誌前号＝したが2年生（昭和30年5月生れ）であると訂正した。

「一般」を3ランクに分割

新・登録制度実施へ

全国評議員会・理事会開く

"中国問題"にも初の見解示す

日本協会は1月21日午前9時30分から現役員による最終全国理事会（定員35、出席23＝成立、欠席11、欠員1）を、同日午後2時から臨時全国評議員会（定員52、出席8、委任状26＝成立、欠席18）を東京岸記念体育会館で行った。

両会議ともミュンヘン後、新たな出発点を目前にして、斯界の流れを変えようとする施策や活発な意見がかわされ、特に一般登録の新システムとして示された「3段階細分案」は大きな反響を呼びそうだ。

また、いわゆる「中国問題」に対し、日本協会が初めてその見解を公けにしたほか、全国評議員会では新年度会長に川村止衛現会長を引きつづき推すこと（三選）を決めた。

両会議でもっとも論議を呼んだのは、総務企画部が提案した「一般登録の新システム」である。

一般登録金の値上げによる一般チームの減少は日本協会の深刻な問題として浮きぼりされ特に一般男女の登録人数が四四八六名（男三七五一、女七三五＝47年6月30日現在）というのは外部の斯界に対する評価をいちぢるしく低下させている。

現実には日本協会へは登録せず都道府県協会どまりの一般チームが全国で300をこすといわれ、これらのチームを「日本協会へ呼びもどすことが今後のハンドボール界発展のため不可欠」（杉山常務理事）との考えから一般を3ランクに分ける新システムが提案されたもので、「C」の登録料は300円におさえたいという額も示された。

これによって全国制覇を狙うトップチームから、月1回、休日にしか集れぬようなチームまで全国のハンドボールチームを日本協会傘下に網らできるという期待で、各理事とも歓迎の意向を示したが「現在、一般登録している292チーム（男女計＝47年6月30日現在）のうち三～四割がC登録に転向すると財政面での打撃が大きい」という危惧も多かった。

しかし「初年度からX年後（注・具体的年数の決定は次回）にはAまたはB登録することを原則とする」という付帯条件があれば、将来は人的にも財政的にもプラス材料が多いとして解決。

「このようなシステムが提案されるのは登録料の高額もあるが、日本協会未登録チームの県内活動を黙認していた本部のなまぬるさも一因」（清水理事）という追及に対して荒川理事長は「C登録が実施に移されれば、すべてのチームに日本協会登録を義務づける」と述べた。

全国評議員会では、理事会と同ようの論議となったが「C登録はチーム登録料を不要とし、個人登録料（1人年額100～200円）としたらどうか」（渡辺五評議員代理・新潟）という意見がつけ加えられた。

結局、48年度以降一般をA・B・Cに分けることと、出場できる大会の範囲については原案（別表）どおり承認。登録料、個人登録料（金額）は次回で決める。

日本協会新登録制度（案）

種別		出場できる大会	登録料	個人登録料	五輪基金	機関誌購読料
高校		あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	要	不要	要	要
学生		あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	要	要	要	要
一般	C（新設）	全国大会（国体を含む）の予選を兼ねぬブロック大会と都道府県大会のみ	要	不要	要	不要
	B（新設）	国体、ブロック大会、都道府県大会のみ。	要	要	要	要
	A	あらゆる大会。但し特に種別を定める大会は除く。	要	要	要	要

台湾と自主交流せず

中国問題については、日本オリンピック委員会（JOC）、日本体協が昨冬、「中国承認」の方針を打ち出したため、日本協会の姿勢が話し合われ両会議とも『JOC、体協の見解を尊重する。中国ハンドボール界の組織と動向が完全に掌握できぬ現時点で積極的な日中交流策は打ち出せぬが、台湾との自主的交流は今後行わない。ただし、世界選手権、オリンピックなどのアジア予選で台湾との対戦がさけられぬ場合、これを拒否することはない』との基本方針を議決。今後はつとめて中国ハンドボール界の動向を研究することになった。なお、台湾をふくむアジア連盟結成問題はIHFからの規約提示が遅れており、今回は何も話し合われなかった。

積極的な新施策を期待

流れを変えよう、とする意見が積極的に述べられたのも今回の大きな特色であった。

全国理事会では「国際的なレベルに到達するために〝全国高校長身選手による試合〟といったものを企画してみたらどうか」（沖田理事）、「国内最上位チームの地方転戦ビッグエベントの地方開催」（角理事）。全国評議員会では「日本リーグの実施を再検討すべき時期にきている。本部役員に多範囲から若手を推す。PR部を設置し積極的なマスコミ対策を展開すべきだ」（野原評議員・大阪）などが出され、このほか、個々の全国事業についても、旧態依然の運営を繰り返すだけではなく、古いカラを破った意欲的なアイデアを盛りこんで欲しいという要望が各評議員、各理事から示された。

財政面では日本協会規約に「日本協会の主催または共催する大会試合に対して放送権料が支払われた場合、その10％を日本協会へ納入する」（第21条）を新たに加えることになった。

全国中学生大会 今年も愛知県で

48年度全国事業では2回目を迎える全国中学生大会を8月、愛知県下で開くことに決めた。大会期日は8月15日から20日までのうちの2〜3日間、大会規模は昨年なみの予定。

「46年度会計報告」を承認

このほか全国評議員会へ報告の機を逸していた「昭和46年度会計報告」が承認された。（全国理事会は昨秋10月15日承認ずみ）

一般会計のほか特別会計3項目を加えると延べ総額約四千五百五十万円という大型会計だったが、本誌103号で既報のとおりオリンピックアジア予選で入場料収入の伸び悩みなどで三百六十万円の欠損となったのを含め例年になく日体協補助金の交付遅延などがあったため当期損失金の総額は計六〇三七、四九七円となった。

なお、機関誌会計は46年度も一般会計に一本化されている。

クラブの基準など承認

また県案の「クラブの基準」が承認され（＝全文次号掲載）、「全日本総合選手権開催基準要項」（＝同）も正式に全国評議員会で可決、いずれも48年4月1日から施行する。

44年以降4年間（2期）を、一応の限度とし登録上、特別扱いをしていた自衛隊チームの取り扱いについては、さらにその期間を2年間延長することが認められた。

2月10日に新理事会
全国評議員会は11日

昭和46年度一般会計

【収入】	（単位円）
加盟金	440,000
登録金	2,781,900
オリンピック基金	166,700
用具検定料	1,415,000
審判審査料	292,600
ルールブック売上	459,550
体協補助金	2,450,000
機関誌購読料	2,654,250
機関誌広告料	1,184,900
雑収入	189,883
第18回NHK杯	611,100
グンメルスバッハ戦	789,660
キール戦	1,140,000
計	14,575,543
【支出】	
競技力向上費	3,093,183
スウェーデン戦全日本費	450,000
全日本男子諸雑費	47,816
会議費	352,855
旅費・交通費	777,720
通信費	1,087,269
加盟費等分担金	730,530
機関誌等印刷費	3,547,190
技術研究費	123,600
人件費	1,784,132
事務局費	34,707
消耗品費	124,345
備品費	106,951
賃借費	300
大会助成金	770,000
編集取材費	264,170
世界女子補助金	188,039
スウェーデン戦費	400,000
予備費支出	103,616
雑損失	167,537
第18回NHK杯	618,241
グンメルスバッハ戦	678,204
キール戦	719,060
ダンケルセン繰越支出	12,040
計	16,281,515
【一般会計当期損失金】	1,705,972

五輪アジア予選会計

【収入】	（単位円）
入場券（主に東京）	3,122,599
協賛記念品	2,611,700
分担金	3,000,000
寄付・協賛金	3,040,000
広告・放映料	560,000
雑収入	630,370
計	12,964,669
【支出】	
IHF関係費	2,137,739
参加国経費	8,589,525
大会費	365,382
実行委費	115,020
全日本経費	1,749,129
雑損失	328,550
東京大会費	1,523,872
協賛記念品作成代	1,770,008
計	16,579,225
【アジア予選会計損失金】	3,614,556

スウェーデン戦会計

【収入】	（単位円）
負担金	3,752,000
日本協会補助金	400,000
全日本代表費	450,000
雑収入	100,000
計	4,702,000
【支出】	
スウェーデン経費	3,876,125
受け入れ費	575,118
諸雑費	249,256
全日本代表経費	718,470
	5,418,969
【スウェーデン会計損失金】	716,969

ギョッピンゲン（西独）が来日
4月、大同製鋼らと3試合

日本協会はかねてから打ち合せを進めていた一九七二年度西ドイツ（男子）チャンピオン「フリッシュ・アウフ・ギョッピンゲン（FA・ギョッピンゲン）」クラブの来日を正式に決め、日程などを発表した。

それによると同クラブは西ドイツのスポーツ外交団体オールド・オリンピックタイマーズクラブがミュンヘンオリンピックの開催を記念して全世界に送りこむスポーツ使節団の日本班の一員として来日するものでE・メイスター監督をふくめ役員2、選手14名で別表のとおり日本チームと3試合を行う。

選手14名のうちにはオリンピック代表のP・ブシェル（178㎝）、U・ラスエン（GK、183㎝）の攻守の柱をはじめM・ミュラー、オーストリアナショナルの一員でもあるC・パッゼルらヨーロッパの一流選手が含まれている。

FA・ギョッピンゲン来日日程

▽4月13日来日　（羽田）
▽15日　第1戦・大同製鋼（名古屋愛知県体育館）
▽16日　第2戦・京都産業大学（京都）
▽18日　第3（最終）戦・湧永薬品（大阪市中央体育館）

同クラブは伝統を誇る西ドイツ球界でも屈指の古豪で一九六〇、六二年の2回ヨーロッパカップに優勝、西ドイツでは11回の全国優勝を誇る。一九七一年のシーズン（一九七一年冬～一九七二年春）には南部リーグで優勝、西ドイツ選手権でも北部の強豪・THWキール（昨春来日）、南部のライバルTV・グロスワルスタットなどを破りタイトルを獲得したもの。現在ヨーロッパカップで準々決勝（ベスト8）に勝ち残っている。

なお、来日に際して国際ハンドボール連盟技術委員S・ペライ氏（西ドイツ）も同行の予定。

▽

FA・ギョッピンゲンは、昨シーズン優勝決定と同時に来日計画を伝えてきており、日本協会も同チームの球歴、実力などから受け入れの方向で交渉を進めて来た。昨秋になって条件の一致をみ、具体的な折しょうに入ったが、ここで前項のようなオリンピックオールドタイマースクラブの線に切り替り12月上旬打ち合せのためわざわざペライ氏が来日、日本体協をまじえて荒川理事長らが話し合い正式にまとまった。

国内における日独親善試合は昭和13年のヒットラー・ユーゲント来日を最初に、FA・ギョッピンゲンシリーズは11回目である。

実業団男女のビッグゲーム

3月10・11日全国実業団ビッグ4大会（愛知県体育館）湧永、大崎、大同、三景。3月16・17日NBN杯全国選抜女子大会（名古屋市体育館）東京重機、田村紡、ビクター、ブラザーが開かれる。

安藤純光氏ら9名
国際審判員名簿発表

国際ハンドボール連盟はこのほど「一九七三年度国際審判員名簿」を発表した。

リストアップされた審判員は33ケ国216名（108組）で日本からは9氏が推せんされている。韓国が初めて8名を推したほかアジア地域ではイスラエル4、クウェート2、レバノン2名が含まれている。

【国際審判員名簿＝日本関係分】
安藤純光、岡前義春、藤田信義、稲石三二、山田計、中西敬一、岡本克彦、嶋田新太郎、佐野和夫

審判着予約
2月28日までに

日本協会審判部では在庫のなくなった審判着の新調を行うことになり、その予約受けつけをはじめた。

サイズは上衣、パンツ、ストッキングともS、M、L、LLの4種類。代金は上衣三千二百円、パンツ千円、ストッキング八百円（注・一揃い五千円）で希望者は各都道府県協会を通して2月28日までに代金を添え日本協会へ申しこむよう同部では望んでいる。

予約数のみ作成するので期限後の購入は難しい。

ユーゴ招待、なお検討

オリンピックの金メダルチームユーゴスラビア・ナショナルの招待について日本協会では昨秋来、同国協会と連絡をとりつづけていたが昨年末になって英国航空（BOAC）を通じユーゴ側から条件が明示されて来た。

それによると、来日可能の日程は今秋9月15日から30日までの16日間でミュンヘン出場の16選手が全員参加というものだが、日本協会は往復旅費を含めて最低千二百万円の経費の裏付けが不充分なため、なお検討を加えることになった。

全日本総合

東京重機、感激の初優勝飾る

～大洋デパートついに敗退～

男子湧永薬品が幸運の初優勝

男女とも常勝チームが敗れ新しい王者が誕生した――今年のナショナルチャンピオンチームを決める第24回全日本総合選手権は12月5日夜の開会式につづき6日から10日までの5日間東京体育館に全国最上位男子16、女子11チームが参加、予選トーナメントのあと男子はベストフォア、女子はベストスリーによって決勝リーグを争った。

男子は予想どおり激しい星のつぶしあいから4チームとも最終日に優勝の望みを残すという大接戦を展開。3連勝を狙う大崎電気（埼玉）が優位を保ったが最終戦で大同製鋼（愛知）に苦汁をのまされ各チームとも2勝をマークできず1勝2分けの湧永薬品（大阪）に優勝がころがりこんだ。大阪代表の優勝は史上初。西日本のチームが優勝したのは第7回（昭30）の西日本日体OB（福岡）以来17年ぶりのことである。

女子も波乱つづき。前年優勝の日本ビクター（茨城）が圏外に去り最終戦の東京重機（東京）×大洋デパート（熊本）に覇権がかけられたが、東京重機は攻守で大洋の動きを上廻り快勝した。女子で東京代表の優勝は第3回（昭26）の芙蓉ク以来実に22年目。

大洋デパートは通算3度目の四大タイトル独占の夢を破られるとともに43年8月の第20回全日本総合選手権以来、昨秋の鹿児島国体までつづけていた全国大会連続優勝記録を「16」でストップされ、また45年8月19日の対東北宗形製作所（福島、現・東北ムネカタ）以来の公式連勝記録も「51」で終止符が打たれた。

なお、来年の第25回大会は12月11日から16日まで東京体育館に内定した。（観衆＝第1日七百、第2日七百、第3日一千、第4日一千五百、第5日二千四百）

中大附高、大崎から15点

男子

▽予選トーナメント1回戦

大崎電気（協推・埼玉）29（12－6、17－9）15 中大付高（高推・東京）

	得	【中付】
GK	0	松下
	0	西川
FP	5	蒲生
	5	佐藤
	4	大林
	0	竹内
	0	安
	1	坪子
	0	浦野
	0	森

（審・岡本、狩野）

7MT（0）15

	得	【大崎】
GK	0	岩下
	0	下星
FP	7	近森
	5	飯田
	0	籏野
	3	東
	1	坂口
	3	佐藤
	4	林
	1	沢田
	3	荒井
	2	前淵

29（6）

日体大（学推・東京）22（11－5、11－11）16 スワロー（教推・兵庫）

湧永薬品（協推・大阪）23（10－6、13－10）16 蒲郡クラブ（社会人・西地区・愛知）

大同製鋼（実推・愛知）17（7－7、10－8）15 法政大（学推・東京）

～以上Aコート～

三景（実推・東京）16（8－6、8－5）11 大阪経大（学推・大阪）

中大（東京）29（12－5、17－5）10 鹿屋第一航空群（自衛隊推・鹿児島）

本田技研（実推・三重）24（12－11、12－4）15 同志社大（学推・京都）

大阪イーグルス（教推・大阪）22（9－8、13－1）9 三春台クラブ（社会人・東地区・神奈川）

～以上Bコート～

○……Aコートはいずれも注目の好カード。超高校級と定評の中大付高は、立ちあがりから堂々の正攻法で大崎に挑んだ。全日本選手5人を揃える大崎はいささかとまどった表情ながらも3分で3－1。しかし中大付は4分蒲生（全日本ジュニア）がゲットしてからはのびのびと動き分5分2－4、10分3－5、12分には大林の巧技で4－7とせまった。

15分をすぎる頃からさすがに体力、技術の差があらわれたが、手固さでは随一といわれる大崎守備陣の中央部に切りこみをかけるなど攻撃面ではしばしば鮮やかなプレーをみせた。

○……大同が危かった。法政は前半11分2－4から柳、村田の活躍で一気に逆転、20分まで優位を保った。大同は強引なプレーが目立ち終盤になってようやく球を廻して25分7－7、中井、藤巾（ともに全日本）らでリードした。

しかし好調の法政は後半13分12－12と再びタイに追いつく粘りをみせた。結果的にはこのあと大同が加藤であげた1点が大きな重みとなった。このゲットで大同は先行したばかりか、波にのる法政のリズムを断ち切ったからだ。25分

16－13と大同リードのあともう一もつれあり法政は27分15－16と迫ったが、大同は28分藤中がダメを押した。法政にとって惜しまれるのは7MTの失敗と後半15分以降射ち急ぎから10分間に1点しかあげられなかったことだ。

○……スワロー兵庫が日体大を苦しめた。両チームともつかんだ攻撃機会をほとんどゴールに結びつけるという展開。裏返せば互いに守りの粘りがもう一つといえた。

前半八たび同点のあとスワローは後半25秒黒田のゲットで6回目の先行、日体は5分すぎからようやく攻守のバランスが整い、小林松岡（全日本）、喜井（全日本ジュニア）らがたたみかけた。スワローもじわじわ盛りかえし23分木盗で16－16の同点としたが、さすがにここで力つき残り7分間で6ゴールを許した。最後は体力差だったがスワローの巧みな試合かけ引きと井上、畑らのゆさぶりは見事だった。

湧永×蒲郡クは順当な結果に終ったものの、蒲郡が小林、大羽、平野正らで前半互角の勝負をくりひろげたのは賞讃されよう。

☆　☆

○……Bコートは4試合とも平凡な展開だった。期待の大阪経大は牛屋の活躍で巧くすべりだしたが三景は前半15分すぎから一気に反撃、後半14分には12－6と開いて押し切った。

同志社大も本田技研の力と技にいいところなく退けられた。本田は相手の遅攻にまどわされることなく、攻撃機をつかむや三浦、新実（全日本）らがなだれこんで豪快なシュートを決めた。同志社大は後半松井の6点をたたき出す活躍などあったが及ばなかった。

クラブ同士の大阪イーグルス×三春台クは意外の大差。大阪はセットからの変化、速攻とも確実で17分までに連続7ゴール、三春台クは相手守備網をたち切るだけのスピードがなく、前半は19分武藤の1点だけ、前半で勝負のメドがついた。

中大×第一航空群は全日本学生での不覚にこりた中大がじっくりと戦ったため第一はひとたまりもなかった。第一は横パスが多く縦への変化をもう少し身につけるべきだろう。

歴代チャンピオンチーム

		【男子】	【女子】
	昭12	大塚ク	…………
	昭13	日体	…………
	昭15	日体	倉敷高女
	昭17	日体倶	倉敷高女
		（以上戦前の全日本選手権）	
①	昭24	日体桜	愛知ク
②	昭25	スワロー松	全山梨
③	昭26	スワロー	芙蓉ク
④	昭27	セントポールA	（休会）
⑤	昭28	全日体大	全静岡城北高
⑥	昭29	全日体大	全静岡城北高
⑦	昭30	西日本日体OB	水海道二高
⑧	昭31	全日体大	半田高
⑨	昭32	全日体大	愛知紡
⑩	昭33	全日体大	愛知紡
⑪	昭34	芝浦工大	愛知紡
⑫	昭35	芝浦工大	愛知紡
⑬	昭36	芝浦工大	愛知紡
⑭	昭37	大崎電気	愛知紡
⑮	昭38	立教大	大洋デパート
⑯	昭39	大崎電気	大崎電気
⑰	昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱	昭41	全立教	大崎電気
⑲	昭42	大崎電気	田村紡
⑳	昭43	全立教	大洋デパート
㉑	昭44	全立教	大洋デパート
㉒	昭45	大崎電気	大洋デパート
㉓	昭46	大崎電気	日本ビクター
㉔	昭47	湧永薬品	東京重機

大同、イーグルスに辛勝

中大は日体大押し切る

▽同2回戦（決勝リーグ進出チーム決定戦）

大崎電気　19（10－5、9－3）8　三景

○……大崎は近森、飯田（ともに全日本）を中心に立ちあがり右、左とサイドぎりぎりからのシュートを決めた。三景も決して悪いデキではなく高梨（全日本）、内藤らが鋭いカットインから得点機をつかんだが大崎ディフェンスは大きく崩れることがなかった。

後半も大崎は巧いペースで試合の主導権を握り着々と加点、一方の三景は後半は20分間ノーゴールに終わり、守備力の差が勝負を色分けた試合といえた。

（佐野和夫）

中大　16（9－6、7－8）14　日体大

○……後半21分14－11の場面で得た7MT、中大ベンチは1年生の藤本（全日本ジュニア）を起用し成功させた。

じりじりと追いあげてくる日体の攻撃、中大にとって3点差は安全圏とはいえなかった。若い藤本の快投は崩れそうだった中大を建てなおした。すぐに花輪（全日本）がゲット、16－11。勝負はここで決まったといってよい。藤本がもし失敗していれば逆に日体が一気に反撃を実らせたのではあるまいか。

ビッグゲームの勝負の岐れ目はえてしてこうしたものだ。

○……日体は前半、小林がよく動いてチャンスをつかみ先行していたが、中大は19分6－6から3ゴール、優位に立った。後半は中大がとって日体がとり返すという進行で20分すぎまで来たわけだが、日体にとって惜しまれるのは、前半20分以降10分間に14本のシュートを放ちながら1点もあげられなかったことだ。前後半を通じ中大GK陣（山田、吉近）の活躍は賞されよう。

学生界の看板カードといわれるにふさわしい力のこもったよい試合だった。

（杉山　茂・NHK運動部）

第24回全日本総合選手権審判団

安藤純光（審判長）、嶋田新太郎（副審判長）、遠藤健次、加藤雅之、狩野幸介、清川守嗣、永山茂、岡井幸田、岡前義春、岡本克彰、岡村昭二、奥村方志、大塚文雄、佐野和夫、砂長誠、柳沢民弥

湧永薬品　21（10－5、11－2）7　本田技研

○……本田の闘志が期待されたが立ちあがり気ののらぬディフェンスを湧永・森に3連続してつけこまれ、7分佐藤（全日本）で1点を返したものの、すぐにそのあとまた3点を失い15分6－1とされてしまった。

主導権を握った湧永はあとは楽に試合を進め、要所をがっちり締めて本田を突きはなした。

本田は個人のシュート力、突進力に頼りすぎ、しかも先制された焦りもあって最後までチームプレーに立ちなおりがみられなかった。

（荒川清美）

大同製鋼　17（5－9、12－3）12　大阪イーグルス

○……大同は前日同よう苦しい試合だった。大阪は巧者揃いらしくベテラン井上のリードから徹底し

たスローペース、チャンスとみるやミドル、サイドでのブロックプレーを使いわけてポイント、守っては焦って射ちこむ大同のシュートをGK本田（全日本）が巧みに捌くという策戦どおりの試合運びだった。

20分1－6と重荷を背負った大同は、ここで野田（全日本）が最前線にあがって大阪のローリングオフェンスを断ち切る策に出た。

野田の思い切った動きは大同に活気をよび戻し、後半に入ると当りの弱まった相手ディフェンスをかわして追いあげ13分7MT（中井）で10－10と初のタイ、14分中井で逆転した。さらに松原がそのあと4点を叩き出して勝利を確定づけた。

大阪は巧く相手を自分のペースに引きずりこみながら野田のプレーに流れを変えられてしまったのは惜しまれる。（杉山）

大崎、中大寄せつけず

▽同決勝リーグ

大崎電気 19（9－8、10－2）10 中大

【大崎】	得
GK 下里	0
GK 岩下	0
FP 近森	5
飯田	4
旗野	0
東	4
佐藤	2
林	0
沢田	1
荒井	0
前淵	0
坂口	3

【中大】	得
GK 吉近	0
GK 山田	0
FP 佐々木	0
花輪	2
山村	1
村田	2
今関	1
松本	4
上村	0
佐野	0
大熊	0
藤本	0

（審・佐野、岡前）

19（4）7MT（0）10

○……中大は佐々木（全日本）にボールが集まりすぎ、全員の動きが乏しく単調なシュート、凡ミスの繰り返しでまったくよいところがなかった。

一方、大崎は飯田、近森ら長身選手がいちだんと迫力を増し片手で自在にボールを操っては中大ディフェンスを崩し豪快なシュートを決め、前半で勝敗の行方がはっきりしてしまい、後半15分16－4のあとは若手だけで試合を進める楽勝だった。（岡村昭二）

大同、残り3秒で同点

湧永薬品 16（6－7、10－9）16 大同製鋼
引き分け

【大同】	得
GK 柳川兄	0
FP 野田	1
藤中	4
加藤	1
中井	7
松原	2
柳川弟	1
小沢	0
北村	0
守田	0
石川	0

【湧永】	得
GK 今井	0
FP 市原	1
木野	6
早川	1
森	1
高橋	5
戸田	2
松井	0
藤井	0
菅	0
田中	0

（審・岡本、狩野）

16（4）7MT（4）16

○……スケールの大きい好試合だった。前半大同は早いボール廻しから中井、藤中が鋭いタテへの切りこみから得点機をつかんで実らせたのに対し、湧永はポストプレーから相手ディフェンスを誘いこんで7MTを得、高橋が着実に得点した。前半20分7－7のあと湧永は22分木野（全日本）、24分森でリード。


オリンピック選手の激突もみどころ―近森（左，大崎）のシュートをカットしようとする佐々木（中大）

後半ももつれた展開となり僅かに湧永が押し気味に試合を進め、17分14－13から木野の連続ゴールで16－13とし勝負を決めたかにみえた。大同は23分加藤で2点差にしたあと24分から1分間に7MTを含む4本の猛攻を防いだGK柳川兄（全日本ジュニア）の好守に応えるように最後まで試合を捨てず27分7MT（中井）で1点差。

残り52秒でダメを押そうとした湧永・市原のサイドシュートを柳川兄がはじき返し、場内の大歓声のなかで最後の攻撃に移り、二本のFTのあと、残り3秒、中央から野田が放ったジャンプシュートは今井の右肩を抜いて土たん場で引き分けにもちこんだ。（大塚文雄）

湧永、自殺点で勝利逃す

湧永薬品 10（9－4、1－6）10 大崎電気
引き分け

【大崎】	得
GK 下里	0
GK 岩下	0
FP 飯田	5
旗野	0
荒井	1
近森	2
東	0
佐藤	2
林	0
沢田	0
坂口	0
前淵	0

【湧永】	得
GK 今井	0
GK 国本	0
FP 戸田	1
高橋	3
森	3
早川	1
木野	1
市原	0
松井	1
藤井	0
菅	0
田中	0

（審・清川、佐野）

10（3）7MT（1）10

○……『試合には流れがある』とよくいろ。しかしこの試合ほど〃流れ〃が前、後半ではっきり分かれたケースも珍らしい。ましてこれほど実力の接近した強豪同士のカードではなおさらである。

前半は完全な大崎ペースだった。湧永ディフェンスの当たりが、やや弱かったせいもあるが、

大崎勢のセットでの動きはさえていた。東、近森が鋭く切れ込んでゆさぶり、長身の飯田にビシビシ打たせた。前半6ゴールのうち、実に4点までを飯田がたたき出した。この間湧永は23分に森がポストから決めた1点きり。あまりにも差が開き過ぎたことと、この日の大崎の調子から見て、勝負は早くも前半で決まったかにみえた。

○……ところが後半にはいると試合の流れはがらりと変わった。湧永はディフェンスを固める一方、攻撃面でも大崎の動きを上回り始めた。逃げ切りをはかる大崎と、なんとしても差をつめなければという湧永の気迫の違いが出たのだろう。湧永は2分、高橋が速攻からゲットしたのを口火に、戸田、森らが次々とポイントして追い上げた。すさまじい湧永の猛追にタジタジとなった大崎は、東と飯田がそれぞれ反則退場を取られるピンチに追い込まれた。勢いずいた湧永は26分木野が同点のジャンプシュートを決め、続いて早川がインターセプトからの速攻で逆転のゴールを奪った。残り時間はわずか2分足らず。

○……だが、勝負とはわからないものである。このあと大崎勢の放ったシュートのリバウンドボールを、こともあろうに湧永の名プレーヤー早川が味方ゴールへ押し込んでしまった。『クリアしようとした手元が狂った』（早川）そうだが、結局この前代未聞の〝自殺点〟で大崎は命拾い、湧永は惜しい試合を引き分けた。（有野徳郎・共同通信社運動部）



湧永薬品のエース木野の豪快なアタック
（対大同製鋼戦）

中大、大同破る殊勲

中大 25（13―15、12―9）24 大同製鋼

【大同】		得
GK	柳川兄	0
	倉谷	0
FP	野田	9
	柳川弟	2
	松原	3
	中井	3
	加藤	2
	藤中	5
	小沢	0
	北村	0
	守田	0
	石川	0

【中大】		得
GK	山田	0
	吉近	0
FP	佐々木	4
	村田	4
	山村	8
	花輪	5
	松本	2
	今関	2
	大熊	0
	佐野	0
	藤本	0
	上村	0

（審・大塚、岡前）

25（0）7MT（1）24

○……中大は前日と見違えるようによく動いた。前半、中大は大同のディフェンスの前へのツメの甘さをついて激しく動き、佐々木が判断よくパスしたボールを花輪、村田らがゲットしてリードした。

後半に入っても中大の動きはリズムに乗った。リードされた大同は焦ってラフなプレーが目立った。

終了5分前から追上げにかかり、1点差に迫った大同だったがすでに遅かった。中大・佐々木と花輪のフォーメーションプレー、GK山田の好守備が光ったゲームだった。（毎日新聞戦評を転載）

湧永、中大から貴重な勝点

湧永薬品 22（13―9、9―5）14 中大

【中大】		得
GK	吉近	0
	山田	0
FP	花輪	4
	山村	1
	村田	3
	今関	1
	佐々木	2
	松本	2
	藤本	0
	上村	1
	松下	0
	大熊	0

（1）14

【湧永】		得
GK	今井	0
FP	早川	8
	高橋	3
	森	2
	戸田	2
	市原	2
	木野	4
	松井	1
	藤井	0
	菅	0
	田中	0

（審・岡木、狩野）

22（4）7MT

○……「大崎×中大戦の得失点差（9点）を上廻る勝利を目指します」（湧永・村中監督）「勝ちますヨ、優勝ですからネ。逃せませんよこのチャンスは……」（中大・岡田マネ）――両チームとも大崎電気がこのあとの試合で負けると判っているような口ぶりだった。

前半15分まではげしいせりあい。そのあと徐々に湧永の多彩な攻撃が中大をしめつけていった。高橋が2点、早川が2点。26分には9―5と開いた。

○……後半、中大は強引に射ってでた。しかし湧永ディフェンスは崩れず逆に5分までに3点を失い、さらに8分以降たてつづけに3本7MTを課せられ15―7と差がついて中大の野望はくずれた。（杉山）

決勝リーグ

（男子）	湧	崎	同	中	P	勝	分	敗	得	失
湧永	…	△	△	○	4	1	2	0	48	40
①大崎	△	…	●	○	3	1	1	1	41	33
②大同	△	○	…	●	3	1	1	1	53	53
③中大	●	●	○	…	2	1	0	2	49	65

（女子）	直	洋	ビ	P	勝	分	敗	得	失
①直機	…	○	○	4	2	0	0	21	13
②大洋	●	…	○	2	1	0	1	15	13
③日ビ	●	●	…	0	0	0	2	13	23

4～6位決定リーグ

	田	日	崎	P	勝	分	敗	得	失
④田村	…	○	○	4	2	0	0	23	13
⑤日体	●	…	○	2	1	0	1	16	21
⑥大崎	●	●	…	0	0	0	2	12	17

大同逆転、大崎の3連勝潰す

大同製鋼 13（5―6、8―6）12 大崎電気

【大崎】		得
GK	下里	0
	岩下	0
FP	近森	5
	飯田	0
	籏野	0
	東	0
	佐藤	2
	林	2
	沢田	0
	荒井	3
	前淵	0
	坂口	0

【大同】		得
GK	柳川兄	0
FP	野田	3
	藤中	5
	加藤	1
	中井	4
	松原	0
	柳川弟	0
	小沢	0
	北村	0
	守田	0
	石川	0

（審・岡木、狩野）

13（3）7MT（2）12

○……第1試合の結果で大崎は引き分けでもOK。しかし明らかに大同の方が余裕をもって滑りだした。1分、3分30秒に藤中、4分50秒に野田と上々のスタートを切り、その後も常に先手をとった。守っては飯田をマンツウマンでマークした。その結果、大崎は近森のパスを荒井、佐藤らが決める形をとらざるを得ず、8―6で前半をおわった。

○……後半開始直後に、大同はすぐ野田が決めたが、しだいに大崎は近森の巧技でよく追い、後半17分には荒井で同点、20分には林のシュートで12―11とリードを奪ったが、主導権を握るところまではいかず、このあと中井に7MT、ジャンプシュートを決められ勝利を逃した。これで、今年度大崎電気は無冠におわった。（藤木）

ブラザー、ビクター相つぎ圏外へ

女子

▽予選トーナメント1回戦

大洋デパート（実推・熊本）10（5―1、5―5）6 美和ク（東京）

日体大（学推・東京）12（5―1、7―2）3 扇屋（次年度国体開催地・千葉）

田村紡（実推・三重）16（5―1、11―0）1 東女体大（学推・東京）

〜以上Aコート〜

東京重機（実推・東京）13（9―5、4―6）11 ブラザー工業（協推・愛知）

大綜電気（実推・埼玉）12（6―3、6―3）6 東京教大（学推・東京）

〜以上Bコート〜

○……Aコートでは美和クの相変らずの奮戦が光った。試合そのものは大洋が前半15分までに島田（全日本）の活躍を中心に4―0とし、そのままの勢いで押し勝ったのだが、チャンスとみるや全員が糸で結ばれたように鋭く動いて得点機をつかみだす美和クのプレーは〝作期〟を感じさせ大洋を上廻る場面も少なくなかった。

日体大×扇屋は扇屋の進境に注目が集ったが、シュート力が未だしで、ディフェンスも荒けずりだった。日体大は攻守に安定、危気ない試合ぶりをみせた。

○……Bコートは、この日のハイライト東京重機×ブラザー工業にファンの目がそそがれた。ともに初優勝を果たすためにはどうしても倒せねばならぬ相手。先取点はブラザーが3分藤田が押しこんだが、重機も20秒後古佐原が返し6分、7分連攻から葛西が決めて序盤の主導権を握った。

重機は攻撃の手を休めず10分すぎ市川、松本（連続）で6―1と開いた。攻撃力の鋭さもあったが、この間のディフェンスの強さは鮮かだった。

ブラザーは15分すぎから反撃を仕掛けたが20分5―7までが精いっぱい、そのあと牧野、古佐原（ともに全日本）にゴールを割られ傷口を拡げたのは拙かった。

後半になると重機は前半ほどのキメの細かさがなくなり、ブラザー鳥居（全日本）を中心とした攻撃に20分12―10と迫いこまれたが22分古佐原が貴重なゲットで勝利を動かないものとした。

東京教大が故障者続出で終始FP5人というハンデにもかかわらず岡田、畑中のコンビを軸に15分まで2―2ともちこたえた。しかしそのあとは疲れがのぞき、無理な守りをつづけて7MTをとられ点差を開かれたのもしかたなかった。

田村紡は、鋭さのまったくない東女体大を一蹴した。

日体大の健闘目立つ
大洋は田村紡に逆転勝ち

▽同2回戦（決勝リーグ進出チーム決定戦）

大洋デパート 8（3―4、5―2）6 田村紡

○……大洋はいつもの切れ味に欠け、前半10分までに8本のシュートをとばしながら1点、田村紡は2分最初に得た好機を金田が活かして1―1、さらに13分三毛（全日本）のミドルで2―1と先行。

大洋は14、15分連攻で一度逆転したが、田村は16分タイにし19分再び三毛が思い切りよく射ちこんでリードした。

後半になるとようやく大洋は動きが滑らかになり、7分から16分までの9分間に垂水（全日本）が7MT3本を含む連続5ゴールという大活躍で主導権を奪い返した。



大洋デパート―ビクター戦，大洋，米の強引な中央突破

田村は辻のゲットなどで最後まで粘ったが、大洋の逃げ切りを許した。後半の勝負どころで金田が負傷し、攻守とも手うすになったことも敗因。（鍋田新太郎）

あきらめていた優勝

強運の湧永薬品

勝負強い男たち――湧永薬品各選手への定評である。

それがどうしたわけか、この大会に限っては、自から〝勝利〟を手ばなしているような試合をつづけてきた。

大同戦では残り3秒で野田にしてやられ、大崎戦ではコトもあろうに早川が同点のプレゼントをしてしまった。大崎とのタイを狙い9点差以上をもくろんだ中大戦も終了25秒前にやらずもがなの7MTで8点差という拙戦。

九分九厘あきらめていた優勝がころげこんだのだから、やはり彼らのもつ〝強運〟は本モノだった。

4年前にスタート、これまでに国体3回、全日本実業団1回の優勝というエリートチーム。

仕事に追われてなかなかまとまった練習ができぬ悩みはあるが主力選手のもつハンドボールセンスは抜群。冷静な判断力を裏打ちにしてある時は強気、ある時は耐えて待つ試合運びは鮮やかである。

4年で日本の最高峰に登りつめたこのチームの試錬はむしろこれからにあるのではないか

愛される社員がモットー

涙にむせぶ東京重機

試合終了とともに両手をあげて跳びあがる選手。あとはもうかけつけたOGをまじえて涙、涙、涙である。近藤金博監督（芝浦工大出）も長かった道のりをふりかえるかのように目をつぶったままベンチの前を動かない。彼のまぶたに一際深く刻みこまれているのは山岡憲一社長のことばだ――『チームを造るのは〝日本一〟が目的ではない。社内の明朗化だ。選手も技術より健全な精神が第一。職場でも愛される部員を育ててくれたまえ』。

昭和38年の創部、文字どおり雌伏10年である。この間手にした主な優勝は関東選手権、関東実業団のローカルタイトル3回だけ。

先輩チームはもちろん、あとから生まれたチームにも「全国優勝」をさらわれた。それでもこのチームはいつも屈託のない明かるい表情で試合に臨んだ。山岡社長のことばが選手たちを支えていたのである。

選手社員ではなく社員選手に徹して得た初優勝、ギコチない手つきの胴上げは人々に清々しい印象を与えた。

東京重機 11（6－2、5－6）8 日体大

○……「今年は近来になく充実している。実業団勢に喰いこむ自信は充分」（藤原監督）という日体大だったが、開始後40秒、重機のエース・牧野にミドルを決められ、さらに8分牧野、10、15分鈴木と追い討ちをかけられ4－0とされたのは拙かった。

日体大はようやく18、19分小貫の巧技で2－4としたが、残り5分に2点を失い4点差のまま。

後半開始後の日体大は鋭かった重機のバス攻法を動きのよい守りで崩し木村（全日本）、赤塚、岩本らの一気の速攻が実って6分5－6、一段と興味をもりあげた。しかし、重機はそのあと市川（全日本）の連続ゴールなどで巧みに立ち直り15分10－5と引きはなし、終盤の日体大の反撃を余裕をもってかわしきった。重機では攻防両面で古佐原（全日本）の機敏なプレーが光った。

日体大はあっさり相手の先制を許したことと、速攻以外に決め手がなかったことが敗因。

（奥村方志）

日本ビクター（協推・茨城）9（7－4、2－3）7 大崎電気

○……前半両チームとも速い球さばきでめまぐるしい対戦となったが、大崎が左右に廻すだけなのに対し、ビクターは池田（旧姓蓮見二、全日本）の強烈なロングシュートをうまく織りこんでポイント15分3－1、20分5－2と順調にリードした。

後半、ビクターは20秒谷沢で8－4と開いたが、その後18分まで無得点、この間大崎は2本の7MT（佐藤）で点差を縮めた。ビクターは19分になってようやく谷沢がゲットして3点差、どうにか逃げこんだ。

（大塚）

田村紡4位を確保

▽同4～6位決定リーグ

田村紡 9（3－2、6－3）5 大崎電気

【田村】	得	
久保	0	GK
沖	0	FP
三毛	3	FP
若林	0	FP
辻	2	FP
久保田	4	FP
笠	0	FP
東	0	FP
金田	0	FP

（審・加藤、柳沢）

【大崎】	得	
和田	0	GK
西村	0	GK
長谷川知	0	FP
新島	1	FP
岩井	0	FP
佐藤	3	FP
席定	0	FP
長谷川清	1	FP
安野	0	FP

0（3）7MT（2）5

日体大 8（3－2、5－5）7 大崎電気

【大崎】	得	
和田	0	GK
西村	0	GK
新島	4	FP
佐藤	0	FP
岩井	3	FP
席定	0	FP
安野	0	FP
長谷川知	0	FP
長谷川清	0	FP

（審・岡村、大塚）

【日体】	得	
大工原	0	GK
長谷川	0	GK
嶋田	0	FP
赤塚	2	FP
小貫	1	FP
木村	2	FP
福田	0	FP
八木	0	FP
岩本	3	FP
小林	0	FP
坂本	0	FP
鈴井	0	FP

8（1）7MT（0）7

田村紡 14（6－5、8－3）8 日体大

【日体】	得		得	【田村】
大工原	0	GK	0	久保
長谷川	0	GK		
小貫	1	FP	1	沖
木村	1	FP	2	三毛
岩本	1	FP	2	若林
福川	2	FP	6	金田
嶋田	1	FP	3	辻
赤塚	2	FP	0	久保田
八木	0	FP	0	笠
小林	0	FP	0	東
坂木	0	FP		
鈴井	0	FP		

（審・岡前、岡村）

14（3）7MT（1）8

○……順当な結果だった。日体大はNHK杯（6月・大阪）で勝っている田村紡に対し、前半リードする場面もあったが、凡ミスで自滅、後半10分10—5と差をつけられてしまった。

大崎電気は持ち駒不足のうえ、柱になる選手も欠いて低調だった立ちなおりを待ちたい。

ビクター3位に終る

重機、申し分ない攻守

▽同決勝リーグ

大洋デパート 10（5—4 5—1）5 日本ビクター

【日ビ】	得		得	【大洋】
渡辺	0	GK	0	小原
鈴木	0	GK	0	森山
池田	3	FP	4	垂水
八重樫	0	FP	0	米
阿部	0	FP	0	加子崎
蓮見	0	FP	3	釼
滝	0	FP	2	島田
谷沢	0	FP	1	蔵田
高野	0	FP	0	植原
額賀	1	FP	0	石井
山口	1	FP	0	篠田
川崎	0	FP	0	山下

（審・奥村、大塚）

10（1）7MT（0）5

○……積極的な射ちあいで見応えがあった。先取点は48秒ビクターが池田であげたが大洋もすぐに追いつきその後は一進一退、後半5分まで1点差でもつれあった。

このあとビクターが大洋ディフェンスの早いつぶしにコンビ攻撃をそがれたのに対し、大洋は米（全日本）の突進からチャンスをつかみ、島田、垂水らが確実にシュートを決めて主導権を握った。攻撃の多彩さで優る大洋の順当勝ちといってよい。（杉山）

東京重機 13（7—4 6—4）8 日本ビクター

【日ビ】	得		得	【重機】
渡辺	0	GK	0	上杉
鈴木	0	GK		
谷沢	2	FP	4	牧野
山口	0	FP	3	古佐原
池田	4	FP	2	市川
蓮見	1	FP	0	村上
阿部	0	FP	2	葛西
滝	0	FP	2	鈴木
高野	0	FP	0	松本
八重樫	0	FP	0	生井
山崎	0	FP	0	荒木
額賀	1	FP	0	菊地

（審・岡本、狩野）

13（2）7MT（1）8

○……女子の上位戦は一つのカラを破ったようである。単調なローリングオフェンスの繰り返しから、そこにミドル（ロング）や、強引な突入をおりまぜ多彩な変化を示しはじめた。速攻の思い切りもよくなっている。

この試合も激しい点のとりあいに終始、見応えがあった。先行したのはビクターだが、重機も2本の7MTなどで逆転、20分には逆に4—3と優位に立っていた。さらに21分牧野22分市川とたたみかけ6—3としたのが一つの勝因である。

重機の勝利を決定的にしたのは後半7分から19分までの連続5ゴールだ。固いディフェンスから相手シュートをカット、牧野を中心に速攻を決め、さらにはセットから古佐原の好リードでチャンスを活かした。攻めこむスピード、シュートのタイミングとも申し分なかった。ビクターも最後まで粘ったがやはり後半なかばでの失点が大きくひびき敗れ2連勝の夢は消えた。（荒川）

東京重機 8（4—4 4—1）5 大洋デパート

【大洋】	得		得	【重機】
小原	0	GK	0	上杉
垂水	4	FP	1	牧野
米	0	FP	3	鈴木
島田	0	FP	2	市川
釼	0	FP	0	村上
蔵田	1	FP	0	葛西
加子崎	0	FP	2	古佐原
植原	0	FP	0	松本
石井	0	FP	0	生井
篠田	0	FP	0	荒木
山下	0	FP	0	菊地

（審・岡前、大塚）

8（1）7MT（3）5

○……前半21分4—3後半6分5—4と大洋は二度リードしたが試合はまったく重機のペースで運ばれた。好調時の大洋ならこの二度の好機を逃すハズはなかった。それがすぐに同点を許し、特に後半の場合は一気の逆転を喫した。垂水のシュートが再三バーに当たり、島田のシュートは打点がいつになく低かった。大チームが敗れる時はこうしたものなのだろう。

○……それにしても重機はすばらしかった。牧野が釼に徹底的にマーク（アサインド・マンツウマン）されながら古佐原が攻防両面で縦横に動きカバー、チャンスには鈴木、市川が貴重なシュートを決め守ってはGK上杉の好判断が再三のピンチを救った。常勝・大洋を破るにふさわしいプレーといえた。

○……大洋はセットに持ちこんだあとも切りこみに鋭さがなくもたついてつぶされてしまう。後半20分からみせた5人で守り垂水を相手陣内に待機させるという窮余の一策も実らず、後半は7分以降無得点、6—5（11分）、7—5（18分）のあと22分市川に速攻を決められ8—5、万事休した。初優勝を飾った重機、女王の名にふさわしい精進をつづけた大洋、ともに拍手をおくりたい。（杉山）

★大洋快記録終る　大洋デパートが昭和43年8月の第20回全日本総合選手権（長崎）以来これまでに連続して優勝した16大会は次のとおり。第20回全日本総合、福井国体、第9回全日本実業団＝以上43年度、第21回全日本総合、長崎国体、第16回NHK杯、第10回全日本実業団＝以上44年度（4冠王）、第22回全日本総合、岩手国体、第17回NHK杯、第11回全日本実業団＝以上45年度（4冠王）、第12回全日本実業団、和歌山国体＝以上46年度、第13回全日本実業団、第19回NHK杯、鹿児島国体＝以上47年度。なお、43年8月東北宗形製作所に21—6で勝って以来、日本ビクター戦までつづいていた公式戦連勝記録も51でストップ。

全日本総合に拾う

★前代未聞の自殺点 優勝争いに影響する湧永薬品×大崎電気戦で前代未聞の自殺点が記録された。残り1分で10－9と湧永リード。大崎最後の望みをかけた佐藤のサイドからのシュートも湧永GK今井のパンチングに阻まれ万事休したかにみえたがはねかえったボールをクリアしようとした湧永・早川の手は悪魔に魅入られたように絶好のシュート動作となり、スッポリと自陣ゴールに無情のボールを押しこんでしまった。

オリンピック選手・早川もさすがに顔色を失い「勝てる試合を落としてしまって……」とガックり。このようなビッグゲームで二度とおこるかどうか判らぬプレーだけに役員もファンも翌日までこの話題でもちきりだった。

★ペライ氏が観戦 親日家のIHF技術委員S・ペライ氏(西ドイツ)がひょっこり姿を見せ渡辺副会長や荒川理事長とともに第1日の後半戦を観戦した。

★主力は子供連れ 幼児の手を引いてぞろぞろ選手が入ってくる。大会本部は大あわてでベンチの傍に子供用の〝特別席〟づくりだ。女子で唯一のクラブ・美和クは選手の大半が主婦という異色チームとして毎年話題をさらうが、今年はママさんに〝昇格〟した選手が多く子連れでのりこんで来た。

相手がナンバーワンの大洋デパートとあっていきなり4－0とされたが、後半は黒川が現役時代をしのばす「一発の強さ」を見せたほか、宮原(早川)、万野(寺尾)、木幡らがシャープな動きで5－5と互角にわたりあった。

試合後さぞかしぐったりと思いきや「終盤追いこむあたりまだまだ私たちもいけるわョ」「なんで現役は大洋に勝てないのかしら」などと意気けんこう。今年第一線を退いた大洋・枝尾コーチは「うらやましい集りですネ、熊本でも近くOGチームの旗上げを計画しています」と話していたが、美和クの活動が全国のOGを再びコートに呼び戻す誘い水になっているとしたらそれはすばらしいことである。



子供連れで試合をし、会場をなごやかにした美和クラブ

全日本総合・疑問と提言・田中　滋章

▼大学偏重組合せに一言……機関誌にも組合せに関する意見がしばしば述べられている。国体女子の一般チーム尊重については一つの意図が見られ試みとしては(良否は別として)理解できるが、年度最後の総決算ともいうべき全日本総合に大学勢が優遇されたのはうなずけない。男子の日体大か中大がベスト4に、女子の日体がベスト6にほぼ間違いなく進出できるように組合され、そのため男子実業団の本田技研(国体4位)又は三景(実業団4位)が、女子ではブラザー(国体2位)が同じ実業団チームに破れて涙をのんだ。

協会内部には学連高揚を唱える人が多いのでその結果とも思えるが、実業団チームで日本リーグを開催して国体から強力実業団を締め出そうと考えている普及部案にも反し、協会自らが首を締めている感がする。

湧永、大同、大崎の3強は別にして、実業団4位グループの本田、三景と大学最強の中大、日体大との実力差がどうであったか私は知りたい。

サッカー界のように日本リーグ1～8位までと、大学の8～1位までとを組合せ、実力の接点がどこにあるのか探り出そうとしている努力と勇気を学べないものか。

年度総決算として全日本総合をわざわざ12月に移行させた英断をすべての点で生かしてもらいたいものである。

▼コートマナーと精神訓練……本誌一〇二号の学生東西対抗あれこれで西川勤也氏も指摘しているように、優秀な選ばれた選手ほどコートマナーを良くする勇気を持って欲しい。現在及び過去のナショナル選手や強力チームが、小さな試合になると審判員のジャッジを小馬鹿にしたような態度を露わにしたり、正規の位置から交替しなかったりする例がしばしば見られる。斯界最大にして最高の権威を目指す全日本総合でもどうかと思うマナーが散見されたのは遺憾である。

ミュンヘンでもヨーロッパ選手の真似をしてデッドボールを足で扱う場面が度々見られ日本人として見苦しい気がした。

彼らには彼らなりの考えもあるだろうが、われわれの見本となるべき人達なのだからここで敢えて『勇気』を持ってコートマナーを良くして欲しいと言いたい。

日本選手の精神訓練面云々がよく言われるが、選手自身がその自覚を持ち、それを自らが実行することから始めるのが第一だ。

それが全てのハンドボール選手及び審判をする人達にもプラスになり、選手自身のためにもなることだろう。(投稿。全日本実業団連盟理事長)

(注) 今月号は読者投書欄「明日への提言」を休載します。(編集部)

★☆★☆★☆★☆★

海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

オリンピック終了で一息

ミュンヘン・オリンピックが終って一息というわけか今シーズンのヨーロッパ球界の序盤戦は極めて平穏である。

各国に共通しているのは、ミュンヘンから来春の世界選手権を経てモントリオールへ向けた新しい強化路線を打ち出していることで例えば西ドイツはナショナルチームの監督をフィック氏からホルスト・ケスラー氏（昭31、西ドイツナショナル～11人制～の一員として来日）に代えたし、東ドイツはフランケ、チンマーマン、ランツら30代選手をナショナルチームからはずし、新たに40名のナショナルプレイヤーを指名、A・B20名ずつの振り分けもすでに終えた。

金メダルチーム・ユーゴはベオグラードに新編成の東ドイツを迎え2試合を行い20—18、17—17。その後はナリをひそめている。

オリンピック後最初の国際大会は11月ジョルジア（ソビエト）でのトビリシ・トーナメントだった。

一方、今年末に世界選手権を控える女子はさすがに活発。カルパティア・カップを口火に各国の交流は極めて盛んである。

ルーマニア、好調な出足
～女子カルパティア杯～

今冬の世界女子選手権の優勝戦線を占えるカルパティア・マウンテンカップは11月末、ヤシ市（ルーマニア）に世界最強の5ケ国6チームが参加して行われ、ルーマニアが4勝1敗で優勝、チャンピオンの東ドイツはコック、ウインクラー、クレッシュマーの主力3人が遠征せず低調、王座復帰を狙うハンガリーはフレックを中心に健斗したが2勝に留った。

ルーマニア	17—17	ルーマニアB
ユーゴ	14—13	ソビエト
ハンガリー	14—8	東ドイツ
ルーマニア	14—9	ユーゴ
ソビエト	13—10	ハンガリー
東ドイツ	18—10	ルーマニアB
ユーゴ	19—15	ルーマニアB
東ドイツ	8（分）8	ソビエト
ルーマニア	記録不明	ハンガリー
ハンガリー	22—8	ルーマニアB
ユーゴ	12—11	東ドイツ
ソビエト	9—8	ルーマニア
ソビエト	9—5	ルーマニアB
ユーゴ	14—11	ハンガリー
ルーマニア	13—11	東ドイツ

【順位】①ルーマニア②ユーゴ③ソビエト④ハンガリー⑤東ドイツ⑥ルーマニアB

ユーゴが首位保つ
～プラチスラバ国際～

国際女子大会・プラスチラバ（チェコ）トーナメントは12月10日から行われユーゴが首位となった。デンマークがチェコ、西ドイツを降したのは注目されよう。

ユーゴ	16（8—5 8—5）10	デンマーク
チェコ	13（6—5 7—4）9	西ドイツ
ユーゴ	9（5—2 4—5）7	西ドイツ
デンマーク	14（7—7 7—4）11	チェコ
デンマーク	9（6—4 3—2）6	西ドイツ
ユーゴ	10（5—3 5—7）10	チェコ

仏、ノルウェー女子の動き

世界女子選手権（12月、ユーゴ）の予選リーグで日本と同組が予想されるのはシードのルーマニアのほかノルウェー対フランスの勝者だが、ノルウェーはハンガリーとの2連戦で8—14、8—12。このあとチェコを招き12—10、12—8と連勝している。フランスは相変らずビゴット、ノエル、グラインらが主力でデンマークに9—9、スウェーデンに4—8のほか西ドイツBに2連敗している。

ソビエト学生が全勝
～トビリシトーナメント～

ソビエト・ジョルジア共和国恒例のトビリシトーナメントは11月15日から行われた。参加チームは世界学生（別掲）を控えたソビエト、ルーマニアの学生ナショナルのほか、東ドイツ、チェコの新ナショナル、それに地元・ジョルジア選抜という興味深いものだったが、ソビエト学生が練習量充分なところをみせて全勝優勝した。

▽リーグ戦

ソビエト学生選抜	26—20	チェコ
東ドイツ	19（分）19	ジョルジア
ソビエト学生選抜	26—22	ジョルジア
ルーマニア学生選抜	14—11	東ドイツ
ソビエト学生選抜	21—15	ルーマニア学生選抜
チェコ	17—15	ジョルジア
東ドイツ	18—17	ソビエト学生選抜
チェコ	14—12	ルーマニア学生選抜
ルーマニア学生選抜	20—15	ジョルジア
東ドイツ	16—11	チェコ

【順位】①ソビエト学生②東ドイツ③ルーマニア④チェコ⑤ジョルジア共和国

ルーマニア、ソビエトの3連勝阻む

世界学生選手権

第5回世界学生選手権は昨年12月28日から1月5日まで、スウェーデンのストックホルムなど5都市に16ケ国の代表が参加して盛大に開かれ、オリンピック選手7人を主力としたルーマニアが、ソビエトの3連勝を阻み初優勝を飾った。

出場16ケ国はアルジェリア（アフリカ）を除いてはいずれもヨーロッパ地域、参加を予定されていたブラジルも大会直前取り消しとなった。

4ケ国づつ4組の予選リーグではポーランドがルーマニアと互角の試合ぶりをみせたのと、フランスが前回4位のスペインに引き分けた健斗が光った。

準決勝リーグはソビエトが比較的楽に試合を進めたのに対しB組は激戦、ルーマニアが勝ちあがった。

決勝・ルーマニア×ソビエトは第3回大会(昭43)の決勝でも17－17から延長にもつれ1点差でソビエトが勝っているが、今回はその時以上の大接戦となりルーマニアが劇的な初優勝を決めた。地元スウェーデンは準決勝リーグでスペインに敗れて調子を崩し、オリンピック優勝国ユーゴは3位だった。

▽予選リーグA組

ソビエト 29－14 ノルウェー
スウェーデン 23－17 ブルガリア
ソビエト 22－14 ブルガリア
スウェーデン 24－7 ノルウェー
ソビエト 25－15 スウェーデン
ブルガリア 19－15 ノルウェー

▽同B組

西ドイツ 17－10 スペイン
フランス 20－8 ベルギー
西ドイツ 23－13 フランス
スペイン 31－9 ベルギー
西ドイツ 27－11 ベルギー
スペイン 13－13 フランス

▽同C組

チェコ 15－12 アイスランド
ユーゴ 38－15 アルジェリア
チェコ 30－17 アルジェリア
ユーゴ 16－15 アイスランド
ユーゴ 16－14 チェコ
アイスランド 32－21 アルジェリア

▽同D組

ルーマニア 16－10 デンマーク
ポーランド 18－5 イタリア
ルーマニア 32－6 イタリア
ポーランド 22－15 デンマーク
ルーマニア 14－13 ポーランド
デンマーク 31－10 イタリア

▽準決勝リーグA組

ソビエト 23（12－6、11－9）15 西ドイツ
スペイン 15（7－9、8－1）10 スウェーデン
西ドイツ 21（13－9、8－5）14 スウェーデン
ソビエト 21（8－9、13－5）14 スペイン
ソビエト×スウェーデン、西ドイツ×スペイン戦は予選リーグの記録を適用

▽同B組

ルーマニア 11（4－3、7－3）6 ユーゴ
チェコ 14（5－5、9－9）14 ポーランド
ルーマニア 14（5－5、9－6）11 チェコ
ユーゴ 21（8－5、13－6）11 ポーランド
ユーゴ×チェコ、ルーマニア×ポーランド戦は予選リーグの記録を適用

▽7位決定戦

ポーランド 24（11－12、13－7）19 スウェーデン

▽5位決定戦

チェコ 16（7－3、9－9）12 スペイン

▽3位決定戦

ユーゴ 19（7－7、12－9）16 西ドイツ

▽決勝

ルーマニア 19（1－0 0－0：0－1 1－0：8－9 9－8）18 ソビエト

ノルウェーが一日の長

～スイス国際リーグ～

世界のAクラス進出を狙う中堅4ケ国による国際リーグ戦は12月20日からチューリッヒで行われ、オリンピック9位のノルウェーが攻守に一日の長を示して全勝、首位となった。

ノルウェー 22－11 オーストリア
スイス 28－4 イタリア
ノルウェー 33－3 イタリア
スイス 14－11 オーストリア
オーストリア 19－8 イタリア
ノルウェー 20－13 スイス

【順位】①ノルウェー②スイス③オーストリア④イタリア

東ドイツBが順当勝ち

～チュニジア国際～

今シーズン、国際トーナメントのトップを切ったチュニジア・トーナメントは11月、新編成の東ドイツBとフランスが遠征して行われ東ドイツBが優勝した。

東ドイツB 17（10－8、7－5）13 フランス
東ドイツB 13（7－4、6－5）9 チュニジア
チュニジア 17（5－9、12－7）16 フランス

活発になった国際都市対抗

いちち下火になっていた〝国際都市対抗〟が昨シーズンあたりから再び活発に行われるようになり、1月1日から西ベルリンで開かれたニュー・イヤートーナメントではグルイアを中心としたブカレスト市（ルーマニア）が優勝、12月にバルセロナ市(スペイン)で行われた都市代表トーナメントではスポニア市（ポーランド）のKS・スポニアがステラ（仏・パリ市）などを破って優勝した。

▽ニュー・イヤートーナメント

（1月・西ベルリン）

▽リーグ戦

パリ市 8－7 西ベルリン市
ブカレスト市 16－6 ウィーン市
西ベルリン市 18－5 ウィーン市
ブカレスト市 18－10 パリ市
パリ市 7－6 ウィーン市
ブカレスト市 13－11 西ベルリン市

FAギョッピンゲン順調

～ヨーロッパカップ～

4月来日のFA・ギョッピンゲン（西ドイツ）は1回戦でCUS・ベローヌ(イタリア)に38－6、32－15、2回戦でもATV・バーゼル（スイス）に22－10、17－15とストレート勝ちベスト8に勝ち残った。このほか2連勝を狙うパルチザン・ブジェロバル(ユーゴ)やライプチヒ・SC(東ドイツ)、MAI・モスクワ（ソビエト）ステアウア・ブカレスト（ルーマニア）も順調だ。なお、ハポエル・ラマツガン（イスラエル）の試合は種々の波紋を生じている。

オリンピック代表選手リポート（完）

ミュンヘンを回顧する

ゆとりのあったアイスランド戦

中井武三

アラブゲリラによる選手村襲撃事件により一日遅れた九月九日午後五時より、一一位決定戦として日本チームのオリンピック最終試合を対アイスランドと戦った。

過去アイスランドとは、世界選手権とオリンピック大会前に練習試合を行なっており、全員が手の内を知っているので、戦いやすい相手である。しかし試合は、前日ノルウェーとの九位決定戦に敗けてしまったせいか、もうひとつ元気がなく、シュートを射ってもバーをはずれることが多く、逆にアイスランドの長身からのロングシュートをきめられ、アイスランド優勢のうちに試合は進んでいったがここで最終試合に敗けることになると、この時のオリンピックのために、あらゆるものを犠牲にして努力してきたことが無になるので、歯をくいしばって日本得意のコンビネーションと速攻で、動きの鈍いアイスランドに対抗していった。しかし前半は一点リードされたまま終わる。後半に入ると日本のコンビネーションプレーがきまりだし日本ペースになった。こうなると世界選手権と練習試合に勝っているだけに余裕が出てきて敗ける気がしなかった。しかしこのアイスランド戦でも、日本の弱点であるロングシュートと体力にものをいわせた強引さに苦戦をし、キィーパーの好守がなかったならば、どうなっていたかわからなかった。

オリンピックでの五戦をふり返って見た時、日本チームが敗れたユーゴ、ハンガリー、ノルウェーとどれを見ても、当初日本チームが考えていたよりもチーム力が数段向上しており、また個人的にも二年前は無名ないし無名に近かった選手、ユーゴのラザレビック、ラブルニク、ハンガリーのパルガなどが世界一流のアタッカーに成長しており、彼らの想像を絶するシュートにより、日本の作戦面に大きな支障をきたした。そして勝ったアイスランド、アメリカについては、事前に手の内を知り尽くしていたので、精神的に楽に戦え勝つことができた。

これらのことを考えあわせた時日本が島国のために、国際試合が数多くできないということが最大の欠点だと、いまさらながら感じとったしだいです。これからも数多くの国際試合がまっています。多くの日本人に今一番必要なのは、多くの選手が外人と戦い、そこから選手自身の肌で勝つための努力をはらわなければならないのではないかと感じました。

（FP、大同製鋼）

印象に残った好選手

野田清

16ケ国252人の選手。史上初のオリンピックハンドボール競技の代表となった選手はさすがに強者（つわもの）と云った感じが濃かったがそのなかから特に印象に残った選手を拾ってみた。

◇フィールド・プレイヤー

まず第一にあげるのは、世界のポイントゲッターとして知られているグルイアー（ルーマニア）である。彼の素晴しさは左腕から放される豪快なシュートであり、その威力はGKを何度も棒立ちにさせていた。また、横への滞空時間の長いジャンプ力は、二、三人のディフェンスの壁を簡単に破り、多くの得点をあげた。これに加え、先天的な読みとカンが各国の執ようなまでのマークをはずし第7回世界選手権大会にひきつづきミュンヘンオリンピック大会で連続ポイントゲッターとして彼を君臨させた秘訣である。

第二にあげられるのは、ラザレピッチ（ユーゴ）。彼の素晴しさは、野獣のような筋力と動物的なカンである。例をあげるならワンステップからのサージャントジャンプシュート（約一メートル程）であり、横への大きなフェントである。この切れのいいフェントで一試合に一、二点のポイントをあげていた。

◇チャンスメーカー

目立たぬ存在であるがユーゴを優勝に導いたホルバト（主将）の動きが光った。彼のプレーは終始沈着冷静であり、ゲーム中の適格な判断力は常にチームを有利に展開させていた。なぜならユーゴのセットに入った時の攻撃が彼の動きから始り最後にロングシューターのラザレビッチ、ラブリニックがシュートを打つというケースがほとんどであった。またディフェンスから攻撃の際中継役として多

くの速攻を成功させていた。
ガツ（ルーマニア）の相手ディフェンスを食ったようなプレーも目立った。その動きは機敏の一語につき相手ディフェンスを読みとる力は最高であり、グルイアーを世界のポイントゲッターにするために大きな貢献をしていた。

◇ポストプレーヤー

（ディフェンス）

一八一センチと外国選手の間では、決して大きな身長ではないが、ポポビック（ユーゴ）があげられ百キロの体重を利用してのポストの精力的な動きで、相手国を悩ませていた。特にポストでボールをもらうやいなやどんな状態でもシュートを打てる能力は抜群。これはユーゴに多くのポイントをもたらすとともに数多くの7メートルスローを得ていた。また、彼が守りに廻った時のフットワークは素晴しく、相手シューターがシュート態制に入る前に全てとめていた。

◇ゴールキーパー

7メートルスロー阻止の王者のアルスラジャク（ユーゴ）である。彼の良い点は、自分の身体の大きさとゴールポストの大きさを頭の中にたたき込んでいることである。これは相手が7メートルまたはシュートを打とうとするとき常に自分が一番有利な位置をとっていることである。このほかペヌ（ルーマニア）やわが本田洋選手の好守も忘れることができない。

ところで各国は、これらの選手をオールラウンドに出場させるのでなくディフェンスをはっきり区別しチームとして選手の能力を最大限に活用していた。（例、ユーゴ、ルーマニア等）

日本がこれから欧州の厚い壁を破り世界のトップクラス入りするためにはこうしたベンチワークを採るのも一策と考える。

（FP・大同製鋼）

ユーゴコーチのベスト7

優勝したユーゴのV・ステンツエルコーチは記者団の求めに応じミュンヘンオリンピックのベストセブンを次のように選んだ。

▽GK ペヌ（ルーマニア）▽FP プリバニク、プロクラヤク、ホルバト、ラザレビク、ポポビク（以上ユーゴ）グルイア（ルーマニア）

五輪アカデミー受講生募集

日本オリンピック委員会（JOC）は、今夏7月13日から29日までギリシア・オリンピアで開かれる「国際オリンピックアカデミー第13次セッション」（ギリシアオリンピック委員会主催）の受講希望者（8名以内）を広く国内スポーツ界から求めることになり、次のような募集要項を日本協会へ寄せた。ハンドボール界関係者で受講希望のかたは2月15日までに日本ハンドボール協会総務企画部（東京都渋谷区神南1。電・467―七〇九七あて）書留便で氏名、生年月日、現住所、勤務先、略歴、専攻分野、修得語学、競技歴を記載して申込むよう日本協会は望んでいる。

国際オリンピックアカデミー第13セッション受講生募集

▽会期　48年7月13日〜29日
▽場所　ギリシャ・オリンピア
▽募集人員　8名以内
▽資格　(1)体協加盟団体、体育系大学ならびに体育研究機関から推薦された者
(2)推薦団体の活動に永く寄与できるコーチ、トレーナーあるいは職員、学生（競技経験者が望ましい）
(3)英、仏、ギリシャ語のいずれかで日常会話ができ、その解読力（テキスト）について自信のある者
(4)年令は原則として35才未満
▽条件　一九七三年7月13日〜7月29日の間の現地滞在費は3名（JOC派遣2名を含む）まではアカデミー側が負担いたしますが、それ以外の受講者については一日7USドルが参加者の負担となりますので、一般参加者が1名を超える場合は、2名以上にかかる現地滞在費を一般参加者全員で平等に負担するものといたします。

この負担金は、1名の参加者がある事由から会期中に遅参あるいは中途引きあげをしても返却できないものとお含みおき下さい。なお往復航空料金と個人雑費は自己負担となります。
▽受講生の決定　一般参加申込者が8名を超えた場合は推薦書類によってJOCが選考する。

オリンピック報告書完成

旧・オリンピック対策部によって編集を急いでいたミュンヘンオリンピック報告書「ミュンヘンを出発点として」（B5判、タイプ印刷、62頁）がこのほど完成、日本協会役員、各都道府県協会、日本体協、報道関係者などに配布された。

世界の競技人口は246万

IHFによると各国協会に登録されている総人口は約百十三万（男女計）。ジュニアの百三十三万を加えると二百四十六万人となる。

青木、石塚君（東京学芸大）安らかに……

追悼特集

本誌既報の11月16日国鉄ハイウェイバス事故（東名高速道）による東京学芸大主将青木四郎君と同マネジャー石塚三奈子さん（ともに3年）の他界は、全日本学生選手権からの帰途であったことや、同大が昨秋宿願の関東学生リーグ1部入りを果たした直後とあって、全国のハンドボール関係者からその死を悼む声が寄せられた。いちぢは大きなショックをうけた学大セブンも新春を迎えて落ちつきを取り戻し、全国からの慰めや激励のことばへの感謝と両君への追悼を本誌へ寄せた。なお、故青木一男君の御尊父から日本協会に寄せられた謝辞も併せて掲載いたします。

背番号2を永く欠番に

樋口　通夫（男子主将・3年）

事故のショックでぼう然としていた我々にとって全国からお寄せいただいた好意は我々にとって大きな慰めとなり感謝のしようがありません。ここに誌面をお借りしてお礼申しあげます。また、重傷を負った金子、上田両君も、金子はすでに全治し、上田は三ケ所骨折しましたが、三月頃には歩ける見込みで本人はすっかり元気です。

しかし亡くなった両君のことを憶うと残念でなりません。マネジャーの石塚さんはハンドボールにだいぶ興味をもちはじめ、よくクラブの仕事をしてくれたのに…、また主将の青木君も素晴しいリーダーシップで秋のリーグ戦にはとうとう念願の一部昇格に導いたばかりで今春のリーグ戦を誰よりも楽しみにしていたやさきだったのに…。

彼とは国立(くにたち)高校以来7年のつきあいで彼の冷静な指導力、人間味のある人格は現在の僕のハンドボールのすべてを育てたといっても過言ではないと思います。また、彼が僕に与えたものがあまりにも大きかったから彼の死がより大きな衝撃だったのです。

学芸大ハンドボール部は彼の背番号2を末永く欠番とし彼らの死を悼むとともにその功績を記念したいと思っています。

なんと短く若い命……

山本　美代子（女子主将・3年）

とうとう煙となってしまった。何と短く若い生命であったろう。彼が残したもの、又、これからしようとしたものは大きい。

彼の私生活は知らないが、ことハンドボールに関して言うならば彼の存在は大きかったのだ。彼が去ってからの男子部員を見るにつけそう思うのだ。私は彼の生前より、あの悪夢のような数日間を契機にハンドボールに関して彼のもっていたものをより多く知ったのである。そう感じたのは私ばかりであっただろうか……。決して忘れてはならない数日だったし、存在だった、青木君は。

青木・石塚両君を悼む

青木君とは、高校三年のインハイ予選からの仲で樋口らと同じクラブチームで共に浪人時代を送り大学へも皆そろって合格し、今まできたのにとても残念でならない。

あの忌まわしい事故は、彼と僕が京都の友人と会うので三年と別かれ、友人らと京都をいろいろ歩き、また飲んだりして少し遅くなってしまったことにはじまったといっていい。あわてて京都駅に着いたのは午後八時頃ですでに新幹線の終電には間にあわず、乗り継ぎで帰るべく案内所を尋ねたら国鉄バスに乗るよう指示された。しかしバス案内所では席はすべて満席でキャンセル待ちしかないとの話で、僕らはバスか電車かさんざん迷っていた。結局バス職員に相談したら親切にも二人分なんとか確保してくれることになった。だが今考えると彼はあまりバスには乗り気ではなかったような気もする。

バスに乗るとき偶然そこでマネージャーの石塚さんと上田さんに会ったのであるが、僕ら四人はバラバラの席を無理を頼んで席を変ってもらい彼と僕が運転席のすぐ後に、その後に彼女達が座ったのである。トラックに直撃した部分である。

僕らは最初楽しく話などしていたが旅の疲れか、やがて眠ってしまった。事故はその後起こったのだが当時の事はほとんど覚えていない。一瞬の修羅図があるだけである。気がついたら隣りのベッドに青木君が死んでいた。あとで石塚さんが救助の遅れで助からなかったことを知った。今まであんなに朗らかに笑っていた彼らがと思うと、どうしても信ずることができなかった。

今はただ二人の冥福を心から祈るばかりである。

（金子　実・3年）

◇

試合中の四郎は実際より大きく堂々と見えた。どんなに苦戦しても下を向くことはなかった。試合に対する集中力は人一倍強く、かつ常に冷静で、ラフプレーに会っても怒ったりせず、チームメートが興奮するのを抑えるのはいつも彼であった。リードオフマンの彼は派手なプレーこそしないが、ハンドボールセンスは抜群であり、強烈なガッツも持っていた。ここで1点欲しいという時に最も信頼できるのは彼のシュートであった。

二度と再び彼と一緒にプレー出来ぬと思うと淋しくてたまらない

（服部豊神・3年）

◇

彼は人間が大きかった。クラブ全員を一つの事に集中させ得たのも、皆一人々々を認め、そして何よりも言動一致していたのが彼のリーダーとしての力だった。彼は多くの苦言、規則を言わなかった

それだけに彼の残した練習中の言葉は頭を離れない。彼のいなくなったこれから、このチームが力をつけてゆくとすれば、やはり彼の力であろう。彼の名のもとに一つになり、一部を維持するだろうから。彼はこれからも東京学芸大学ハンドボール部に生き続ける。

（村田正之・3年）

◇

我々にはすぐ上の学年がいなか



青木君のリードで二部優勝をとげ，入替戦では立教大に勝ち，一部にあげた。青木君（白いユニホーム）のプレーはもう見られない……。

ったために2年の秋のリーグ戦が終ると指導権が回ってきた。青木を主将に選ぶことはほぼ全員一致で決った。一般に主将というのは名誉職かもしれないが、我々のようなチームにおいてはかなり厳しい仕事であることは確かであった。というのは学芸大には以前から専任のコーチがいないため主将がその肩がわりせねばならないし、2年生全員が末っ子だということも難しい原因であった。そんな中で青木は立派に主将を務め、うまく我々のチームを導いていった。

彼の人間的なものは言うまでもなく、その指導力を失ったことは我々にとって大きな痛手である。

（大高　優・3年）

◇

我クラブには、個性に富んだ者が多いが、その中でも彼は秀でていた。彼はどんな時でも動揺せず、落付いており、一見とぼけてさえ見えた。しかし彼は確かな信念を常に持ち、独特の持ち味でもって人を知らず知らずのうちに自分のペースに引き入れていく力があった。彼は長距離を走りこむことは最も苦手なことであったようだが、いつもトップになって走っていた。その歯を喰いしばっている彼の顔が今でも目に浮ぶ……。

（梅原映一・3年）

◇

青木さんは意志の大変強い人で、よく「俺たちは大学生なんだから自己管理はしっかりしなければいけない。」といわれ、それを確実に実行していました。青木さんが主将になってから、練習をやめようということになったのですが実行したのは青木さん一人でした。その他、練習中でも練習以外でも一回決めたことは自分がどんなに苦しくても決してやめるような人ではありませんでした。

（江成元伸・2年）

◇

彼がキャップテンになった二年の秋からは学芸大は走ることを覚えた。週に二回のロードワークをはさみ、百米、五十米の各インターバルやトレーニングセンターを使用しての筋力トレーニングなど基礎体力をつけることに専念した。

監督やコーチのいない学芸大では主将が全部その役を引き受けなければならず、人一倍疲れるのに誰もがいやがりまた彼自身も苦手な持久走を彼はいつも先頭に立って走っていた。そうした中でも彼は末っ子チームの気分屋達一人一人をよく理解し主将としての責務をりっぱに果していた。部員の信頼を集めチームを一部に引っぱり上げた矢先に今回の事故に合い故人と化してしまった。本当に彼の死が悼まれる。いまでもあの歯を食いしばって走っている姿が目に浮かぶ、またいつまでも忘れないだろう。

（斉藤辰雄・3年）

先般、四郎儀死去に際し、日本ハンドボール協会、関東学生ハンドボール連盟はじめ、全国各ハンドボール関係者におかれましては、御懇篤なご弔詞をいただき、且又、御鄭重なるお供物を賜り、ご厚情の程まことに有難く御礼申し上げます。

本来ならば、各連盟、及び、各大学に参上いたし、お礼申し上ぐべきところですが、本誌の誌面をお借りしまして、お礼に代えさせていただきます。

尚、本人の遺志を慮り、少額ではありますが、ご香典の一部を、日本ハンドボール協会普及部に寄付させていただきます。

また、生前お世話になりました都中体連ハンドボール部、高体連ハンドボール部、関東学生ハンドボール連盟の諸先生方、諸先輩の方々に心より厚くお礼申し上げます。

極寒の折、皆様方のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

昭和四十八年一月三日

父　青木一男

教職員研修会報告②

ハンドボールゲームの間合について（抄録）

斉藤和夫

　間合とは、ハンドボールで守備と攻撃の関係で、どのくらいの距離がもっとも得点をあげやすいかこれを考えてみたのがこの研究である。もちろん個々のプレーヤーによって、種々の条件が異なり、万人共通のものはありえないではあろうが、ゴールのチャンスを得るための大きな要素の一つとなりうるものではあろう。

　守備側から離れてシュートする際にはゆとりがもてる。しかし、守備が近い場合には、余裕のないシュートにおわる場合が多い。

　守備側にとっても、より得点を得にくいように守る必要がある。そこで、この研究を通し、攻守ともにもっとも有効なところはどこなのかを知ることができよう。

　私の所属している高校の選手はめぐまれた心身の生徒が少ない。どうにかして勝利の喜びを味わせてやりたいと思いデータを集め、応用してきた。これもその一部で、これらデータを使い、それぞれの選手の特性に応じて、攻防にとり入れているものである。

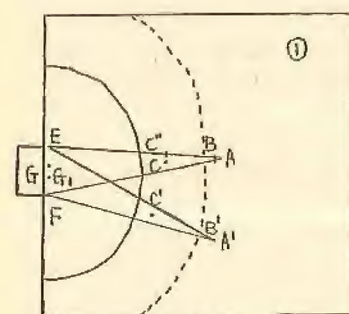
　およそスポーツに於いて、勝つためには、競技そのものを分析し、自分を知り、相手を知り、又は相手を洞察できるという自信の上にたっていることが重要である。

　この記録は多数の生徒が二手にわかれ、各試合の内容をテーマに従って記入したものであり、しかも一つの事象に関し、多数で記入し、それを平均化してまとめたものである。

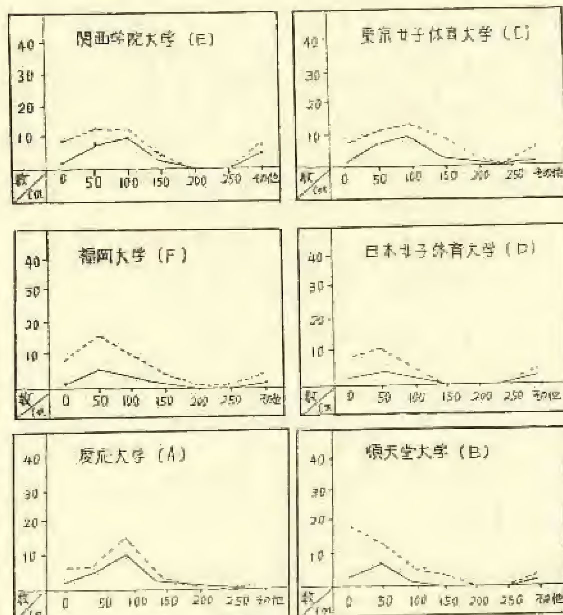
(1) 間合と得点について

　得点はゲームを決定するものとして最重要なものである。従っていかに高能率に得点をし、それを防ぐかということがハンドボール競技である。

　シュートはキーパーと1対1になればもっとも容易である。そしてシュート位置が近ければ近いほど容易にゴールインできる。しかし、ディフェンスがシューターの前にいなくても、それを追うだけで、精神的負担はます。まして、シューターの前にディフェンスが位置し、シューターの好位置をマークすることになれば、確率はぐっと落ちよう。いいなおせば、間合をつめてくる状態となれば、シューターは技術的にも精神的にも余裕をもってシュートすることは不可能になる。またカット、キーパーボールから逆速攻を出される恐れも生じよう。ボールカット、それをさけようとすれば、キーパーのえじきとなる。このような形で間合が重要な要素となってくるのである。ディフェンスの間合のとり方いかんによって、GKはボールコースを絞ることもできるし、逆に動けなくなることもあり得る。



　たとえば図1のようにAに対しBはEFをかくし、ゴールを守っているが、Cに位置した場合にはGKは両サイドに打たれる可能性があり、またさらにAの位置がディフェンスによってかくされてしまい、ボールがディフェンスをこえて、はじめてGKに見えるということになり、きわめて不利になる。それがC″に移るとGKからAが見えるようになり、GKもG′に移り、ゴールの右半分はC″が、左半分はGKが守ることになる。これが定石であったのであるが、近年その定石を破るような形のプレーを散見する。とすれば、間合を研究し、そこを基礎としていくことが必要になってくる。そこで実際の試合ではどのようになっているかを示したのが右のA～Fに掲げる図である。



　このグラフの点線はシュート数実線がゴール数である。各チームとも技術、体力、戦術ともマチマチであるので、一ガイには比較できない。

　慶応はポスト、ブロックなどによってディフェンスをさげロングを主武器にしているチームで、間合がつまった時には、ポストにボールを入れ、そこをつき、よく間合を自覚し攻めている。慶応の攻撃しやすい間合は50、100、150となる。

　順天堂は走りまくり、出足のはやい攻撃が特徴で、走りがとめられるととまどう場面もある。身長がないため、ディフェンスに近づき特殊なシュートとポストとを多用するため、間合は50がもっとも

好位置のようである。

東女体大はポスト、ブロックでディフェンスを下げ、その上からうつことを特長としている。この場合50、100が良い。

日女体大はポストプレーに頼る50ができとうなところになるようである。

関大は走りシュートという準速攻型に2名のロングシュ!ターを配している。50、100、150というところが得手のようである。福岡大はやはり50、100が好いようである以上の6チーム若干の違いはあるが、50~100の間合がもっとも好位置ということになる。ディフェンスはとにかく早く間をつめることが重要なことである。

シューターと守備の間合が0の場合には、守備側にカットされるなり、ディフェンス側に反則されることになり、この反則でせっかく作った守備の乱れを立て直す結果になる。間合0の場合に必要とされるのは、これを振りきる体力と技術である。

間合50では、守備側のカットとつめられたという精神的負担、シュートに余裕がなくなるということで、瞬間的な決断力と自信が要求される。この場合シュート動作以前にシュートするゴールの位置が考えられている。

100の場合には、充分に余裕があり、充分にシュートを打ちわけられる。150~200の場合には、長身で走りこんできた時に上から投げおろすシュートが有効である。

ディフェンス側からみると、0の場合は、反則もしくはカットを狙うのを、ケースケースで考えていくのが良い。50の場合は、より精神的負担を重くするように、半歩でも前にでるように心掛ける必要がある。またこの距離はフェイントがもっとも良くかかるので、この点にも注意が必要である。すばやく相手の行動を予知する能力も要求される。150~200には、やはりなんといっても距離をつめることが重要である。それとともに守備側のコンビを良くとり、スイッチなどの方法により、次の攻撃に備えなければならない。それとともに何とかして、攻撃のタイミングを崩すように努力することも重要である。これらをコンビによってとることにして、GKの片側にのみシュートが可能になるようにするのが最良の方法である。

これらを基礎にして、各チームの攻防上の特性を生かしていく必要もある。

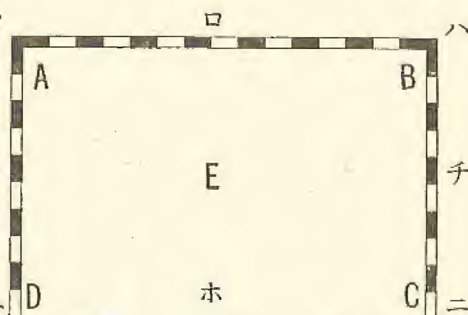
(2)間合をつめたときの
ボールのコースについて

前項にもあるよう、間合がつまった場合には、シュートボールのコースは相当にずれてくる。この記録にもあるように大学の選手にでも、このことはあてはまる。ゴールの位置は下図のようにし、それに近いコースはそこに含めた。

シュートを点線、ゴールを実線でこれをグラフにすると、次頁のようになる。

きょり＼チーム	慶応 得点（総数）	順天堂 得点（総数）	東女体 得点（総数）	日女体 得点（総数）	関西学院 得点（総数）	福岡 得点（総数）
0	2(7)	3(19)	1(7)	1(8)	2(8)	1(9)
50	5(7)	7(13)	7(11)	3(11)	6(11)	6(15)
100	11(16)	1(6)	9(12)	1(5)	8(11)	3(7)
150	2(4)	0(4)	2(9)	0 0	2(3)	1(3)
200	1(1)	0 0	1(2)	0 0	0 0	0(1)
250	1(1)	0 0	0 0	0 0	0 0	0(1)
その他	0(1)	2(4)	1(6)	2(4)	4(6)	2(6)

間合0では順大も慶大も似たような傾向を示し、50になると体格差が明確に現れ、100になると順大は得点できないが慶大は得点を重ねている。更により大きくなっても慶大は得点できる。傾向としては、A、B、Cがいずれもハに流れていくようである。これは右半面の



アタックが多いからであろう。

女子の場合0では、ほとんど大差はない。50では、走る東女がAを決めている。他方日女は若干の得点はあるがミスも多い。明らかに走り勝ちといえそうである。100となると、東女と日女の差は大きく、いかに走ることが重要かよく判ろう。150になると女子では、キーパにキャッチされやすく、200となると全く安全になる。これは間合というよりも、ゴールからの距離ということになる。

女子の場合には、50~150に注意して守ればよいことになる。特につめることが男子に比べ大きな効果を生みだしていることに注目したい。

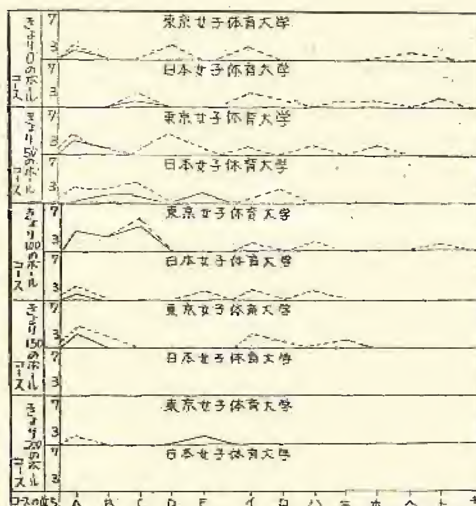
(3)つめによってシュートを
断念したと思われる数

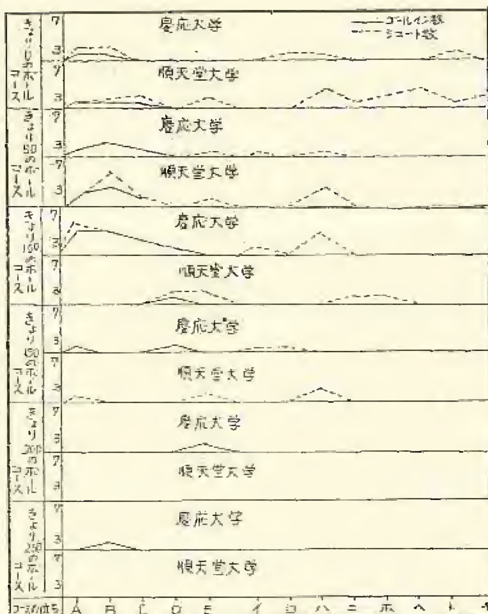
これは46年度のインカレの二試合の記録であり、当初からフェイントと思われるものは除外した。ボール・プレーの展開が早いため見分け難いものがあったが、正確を期したつもりである。つめによって、シュートからパスをポストもしくは左右に流す場合が多い。

0の場合は、シュートの形を見せ、バックパスをするケースが多く、50はシュートを打つことが多くなり、100になると、シュート体勢であってもムリしてシュートはしない。これは充分により有利な位置にある味方が見られる余裕があるからである。150になると、ゴールとの距離があり、ディフェンスに片側をつぶされるようなつめがあればすぐに他のプレーヤーにパスしている。200以上は意表をつく意味でシュートをするが、あとは150と同様である。

データは4チームとも似たような傾向を見せるが、関学だけは度合が平均的で、速攻を主武器とするチームの特徴が良く現れている。

以上のデータから、各チームはそれに対応できる守備をよく考えて、準備していく必要も生じよう。またこれをいかにしてゲームに生かしていくかは、今後に残さ





れた課題でもある。

(4) シュートとそれに移る前のステップについて

(1)、(2)、(3)に記したように攻撃はいかにして、守備との間合をとるかがゴールの一つの要素であるかは明らかである。

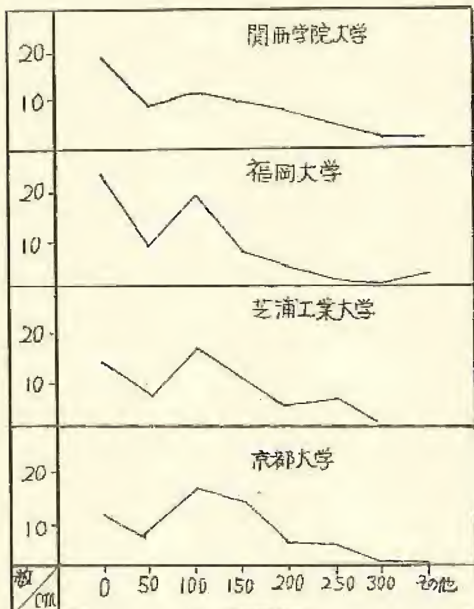
この間合を保つために、どのような工夫をしていったかよいのであろうか。これを見るため、関東学生一部の日体大と東京教大、同四部の千葉工大、東京工大（いずれもデータ当時）の四校のデータを次表にかかげる。

これはシュート前のステップの記録である。ステップを少なくすることには、二つの意味が考えられる。一つはGKの呼吸の整わないうちにシュートを放つ、もう一つはディフェンスとの間合を保つためである。

チーム名	得	ステップ数 0	1	2	3	
日体大	21	5	8	5	2	0
東京教大	19	2	4	2	1	0
千葉工大	15	0	1	4	9	1
東京工大	11	0	3	1	3	4

ステップ0は体力、技術両面において、相当の訓練も必要であり技術的にはもっとも高度なものであろう。四部校には全く見られない。ワンステップもこれらには、1と3見られるだけである。スリーステップでは、一部校は1と2四部校は3と9と大差があり、四部校には3歩をこえ着地寸前のシュートの得点がある。またこのオーヴァーステップ直前の得点はいずれも同一プレーヤーによるものであり、この他にオーヴァーステップになったものもいくつかみられた。

以上のように、間合を保つため技術的に優秀なチームほど早いステップでシュートを打ち、ここでとりあげる間合を保つ問題を解決している。



守備側から見れば、いかに出足よくつめてみても、受動的立場にあるため、シュートを完全に阻止すること、またシューターの走りを止めることは不可能である。

走るスピード、すばやいパス、すばやいシュート体勢からのシュートという形で攻撃されれば、間合をつめる時間的な余裕はない。これを押えるには、高度に訓練され、コンビのとれたチームは別として、中盤からマンツウマン気味にマークし、少しの動きに対しても出足を押える動きをしていかなければならない。これは相当な神経を使用し、長時間のフットワークが必要であり、体力的にも精神的にも鍛練していかなければ無理である。

GKも気がぬけぬ時間が長く乱れを生じ易い。3歩目のシュートは守っているものすべてにとってきわめて守り易い状態にしてくれる。ステップは少なければ少ないほど効果は大きく、ディフェンスはマンツウマン気味に巧みにスイッチしていく以外には方法はないのではないだろうか。

(5) ボールカットと速攻

ボールのカットはディフェンスにとって、きわめて重要なことである。一歩つめればボールカットができる位置が理想と考えられる。これはシュート体勢にあろうとそ

うでなかろうといえるであろう。これがカット成功の要素であると考えられる。そして、常に攻めの状態で手足のかまえを敏捷、正確に動き得るようにしておく。

相手のボールをカットし、味方のものにするということは、攻防が一転することであり、攻撃の基点となるものである。そして相手の攻撃にスピードがあり、カットが計画的あればあるほど、カットボールは得点に結びつきやすい。

攻防が一転することから、相手に与えるダメージはきわめて大きい。次に関東学生一部校二と四部校二（測定当時）のデータをかかげる。

四チームの記録をみると日体大は16、その内7がシュートカットこれらのうち得点になったのが7と総得点の3分の1にあたる。教育大はカット9、内シュートカット4、得点になったのは3でやはり3分の1を占めている。四部校では、千葉工大はカット数19、内シュートカット6、得点に結びついたもの4で総得点の5分の1になる。東京工大では、カット数は15、シュートカット8、得点に結びついたもの2で6分の1になる。

以上の結果からみると、強力チームほどカットが多く、そのカットを得点に結びついている。総得点の3分の1がカットからということになれば、ハンドボールで勝つためには、ディフェンスの研究は欠かすことのできないものとなろう。

我々は従来の習慣によって、攻撃を中心に指導し勝ちであるが、これは反省しなければなるまい。ここで注意されるのは、そのカットへの意欲を攻撃が利用することである。例として、昭和45年前後の立教大学チームがあげられる。この頃の立教の攻撃はカットに出るディフェンスの一足一刀の間合にボールを渡し、それをおびきだし、そのあいた空間を利用して、ディフェンスのアキを作る。そこでシュートができなければ次のアキをというようにディフェンスをかきみだす作戦として利用し、そこからシュートするというものであった。

しかし、これは確実で、高度な技術が必要であることは云うまでもない。ディフェンスがカットに

チーム＼カット	カット総数	得点と結ぶ
	( ) はシュートカット	
日本体育大	16 (7)	7
東京教育大	9 (4)	3
千葉工大	19 (6)	4
東京工大	12 (8)	2

出ることが、攻撃の基点となるのである。

ふりかえるならば、ディフェンスがカットに出ないようなパスでは意味がないとも云えよう。ここでは徹底したコンビプレーが要求されるわけである。

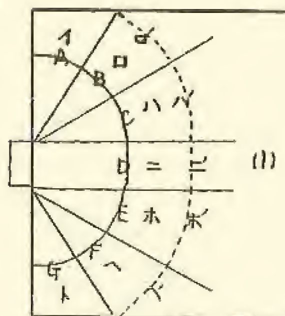
ディフェンスがカットに出るのは、行と云っても、正確に相手のプレーをよむことが必要となる。

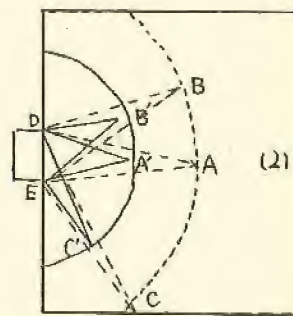
(6) 間合のつめについて

生徒を指導する場合、ゴール中央、しかもエリア附近からのシュートがもっとも確度が高いとしている。しかし実際にはどうであろうか。下図(2)によるとA、B、C、よりもA'、B'、C'が良いと云うことであり、しかもCよりB、BよりAが良いと云うことになる。

図(1)のA、B、C、D、E、F、Gはもっとも注意を要する位置である。ボールをもっているといないとにかかわらず、ツメた場合を下表にするこの場合のツメであるが、日体大と教育大は中心C～Eは云うまでもなく全般的につめている。他方、千工大と東工大はDを中心として、サイドにいくほどつめていない。

イロハニホヘトになるとどうなるか、日体大、教大ともニを中心にてってい的につめている。ロ'、ハ'、ニ'、ホ'、ヘ'についても同様な





ことが云える。

日体大、教大の場合、エリア近くではFが多く、中央は少ない、やや離れると中央が多くなる。逆に千工大、東工大の場合、エリア近くで中央が多く、やや離れるとハ、ホが多いと云う形になる。またそれ以上の距離になるとあまりツメてはいない。上位校では、得点がもっとも可能な位置に人をいれないが、下位校では易々といれている。失点の可能性は云うまでもない。

位置	日体	教大	千工大	東工大
A	29	31	19	31
B	36	45	23	26
C	31	30	53	48
D	28	31	56	59
E	37	41	49	52
F	43	39	41	43
G	31	33	22	24

位置	日体	教大	千工大	東工大
イ	9	21	12	14
ロ	17	29	46	43
ハ	57	58	62	59
ニ	84	92	33	41
ホ	53	59	63	52
ヘ	18	24	39	36
ト	13	15	9	11

位置	日体	教大	千工大	東工大
ロ'	7	3	2	5
ハ'	39	28	11	16
ニ'	92	72	21	27
ホ'	43	31	20	21
ヘ'	11	4	6	7

☆

以上、6項目について、データを考えてきたが、いずれをとっても、ツメがいかに重要であるかが判ったと思う。

攻めの基点としてのディフェンス、精神的、心理的、体力的、技術的、戦術的にディフェンスを研究することが勝ちを握る鍵であることを確信し終りとする。

合織糸・合織混紡糸



田村紡績株式会社

社長 田 村 正 衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593－65－2156（代表）
郵便番号 512

国体への注文（投稿）

北井晴次

少し時期遅れであるが、国体に参加して痛感したことを述べてみたいと思う。

まず、熱気あふれる高校生の参加が制約されすぎていて盛りあがりに乏しいということである。この制約は、ハンドボールの国体競技規則によって規定されているものである。

そこで他競技の同規則を調べてみると、バスケットの場合、例を関東地区にとってみると、地区予選通過数が、5種別の割り合いが各々、1/8、1/8、2/8、3/8、フリー（予選なし）となっていて、毎年この割り合いが5種別に順番にずれて行くのである。従って、今年1/8で苦しくともやがて3/8、更に予選なしで本大会出場というように、本大会へ参加できる感激を味わうことができるのである。

同じ方式は、バレーボール等にも見られ、サッカーはハンド同様固定しているが、それでも高校はなんと7/8という高率である。

この方式を考えてみると、競技全体で本大会に出場する全種別数は毎年変わらず、その中での割り合いが変化するということである。

本大会への出場チーム数を増すということは、国体委員会の意向にも反することで不可能であるが、この方式は固定したものよりはるかに長所が多いと思う。

国体のハンドボール競技規則というものは、あくまでハンドボール独自のものであり、その改正は、ハンドボール独自で国体委員会の意向内において容易なものであるはずである。ハンドボールが現在のように本大会出場数を固定した時、一般を多くすることが即ち普及につながるのだという論理であったと聞くが、現実は果してそうだろうか。やはり若い高校生の世代により強く認識させることがまず第一歩ではなかろうか。

現在の固定した方式では、高校生の競技生活は非常に早い時期に終止符をうつ。その時期が早ければ早いほど、高校卒業後の競技生活とはつながらなくなってしまう。現在のように十月の国体まで競技生活を続ける高校生というのは本当に限定されたものであり、陰でその何十倍もの選手がはやばやとハンドボール生活を中止してしまうのであり、それらの中にどれほどすばらしい可能性を秘めた選手がいるかも知れないのだ。

現在のように多様化された高校生にとって今のままの方式ではあまりにも魅力がすくなすぎると考えるは私一人であろうか。

昭和五十年には、国体は年令別になると聞くが、陸上等の個人競技はいざ知らず、我々のようなチームゲームは一体どのような形にと聞くと、すべての競技が年令別になるという可能性に疑問を抱く人もいる。しかし、どんな形にしろ、今のような地区予選が残されるならばやはりこの方法も考えていく必要はある。ともあれ、ミュンヘンでの反省を所々に聞くが、強化の第一歩は普及であり、まず若い世代を掘りおこすことであり、そのよい機会が国体である。昭和五十年などという全体の話を待つまでもなく、他競技のよい点はすぐに見習ってとり入れていただきたいと思う。

関係者の早急な一考をおねがいするとともに、決断と実行を期待する。

（了）

〃国体を普及の場に〃

日本協会普及部中央委

国体の全面的な再検討を手がけている日本協会普及部は昨年12月5日東京で中央委員会を開き、昭和50年度（第30回大会）に大幅な改正＝成人男女、少年男女4部門の実施＝が行われることから、ハンドボール界でもこの機をとらえて抜本的な改訂に踏み切る方針を決め昭和49年度（第29回大会、開催地。茨城県水海道市）を移行年度とするよう日本協会への提案を申し合わせた。

50年度以降「国体を競技力向上の場とせず普及の場とする」という同部の姿勢にのっとり、クラブ育成の策として種々の提案が出された。

このなかには「50年度からは男女とも全日本実業団選手権のベスト8を除外する」「成人男子を成人（18～29才）、壮年（30才以上）に細分する」などの意見が出された。

これらの構想は具体的な数字として、いずれ全国理事会で協議されようが激論は必至。なお、48年度（10月、千葉県佐原市）はすべてこれまでどおりの規程で行われることに決定している。





男子は名城、女子は中京勝つ

第13回愛知学生選手権は昨年12月14日から20日までの5日間愛知県体育館などで行われた。

9校15チームが参加した男子は名城勢が準々決勝で中京勢に、準決勝で南山勢に完勝して制覇、4校5チームによる女子は予想どおり中京が連勝した。

▽男子1回戦
中京 27―7 名工大B
南山 27―11 名大B
南山 18―15 名大
愛知大 不戦勝 愛知工大
愛知大B 21―11 名古屋学院
中京B 20―6 名古屋工大
名城B 23―14 愛知教大

▽同準々決勝
名城 10―8 中京
南山 21―5 愛知大
南山B 14―13 愛知大B
名城B 19―17 中京B

▽同準決勝
名城 18―13 南山
名城B 44―18 南山B

▽同3位決定戦
南山 23―11 南山B

▽同決勝
名城 24(11―9, 12―9)18 名城B

▽女子1回戦(1試合)
愛知教大 不戦勝 中京女大

▽同準決勝
中京B 13―2 愛知教大B
中京 9―4 愛知教大

▽同3位決定戦
愛知教大 14―9 愛知教大B

▽同決勝
中京 9(5―4, 4―1)5 中京B

各地の記録

那覇商OB、初の栄冠

▼第6回沖縄総合選手権(12月・豊見城高ほか)

▽男子準々決勝
沖縄教員 25―21 豊見城OB
浦添高 13―11 知念高
興南高 24―15 琉球大
那覇商OB 19―12 糸満OB

▽同準決勝
那覇商OB 21―13 浦添商
沖縄教員 18―14 興南高

▽同決勝
那覇商OB 22(8―7, 14―11)18 沖縄教員
那覇商OBは初優勝

▽女子準々決勝
浦添高 10―8 知念高
中頭 22―7 知念OGク
興南高 14―3 糸満高
小禄高 30―10 真和志高

▽同準決勝
小禄高 11―9 興南高
浦添高 11(分)11 中頭
7MTによる勝負結着方式の末浦添高4―1中頭となり浦添高の勝ちが決定

▽同決勝
小禄高 6(5―2, 1―3)5 浦添高
小禄高は5連勝

LBC、松門会を制す

▼第5回東京都男子クラブトーナメント(11月・東京重機球技場)

▽準々決勝
松門会 15―13 S・D・P
関東ク 15―10 神代ク
LBC 27―14 荏原ク
若木会 不戦勝 早稲田ク

▽準決勝
松門会 15(分)15 関東ク
抽せんで松門会の勝ち
LBC 27―14 若木会

▽決勝
LBC 23(10―6, 13―7)13 松門会
LBCは初優勝

愛知は名城クが優勝

▼第14回愛知クラブ対抗リーグ(11月・名古屋市体育館)＝男子のみ

▽1部
名城ク 29―14 大江ク
東海ク 12(分)12 愛教ク
桜丘会 16(分)16 愛教ク
桜丘会 28―16 東山ク
大江ク 21―15 東山ク
桜丘会 19―15 名城ク
東海ク 28―12 桜丘会
東海ク 14―13 大江ク
東海ク 23―14 東山ク
愛教ク 11―7 東山ク
名城ク 33―19 愛教ク
愛教ク 22―20 大江ク
桜丘会 19―17 大江ク
名城ク ― 東山ク
名均ク 18―14 東海ク
【順位】①名城ク②東海ク③桜丘会④大江ク⑤愛教ク⑥東山ク

▽2部優勝決定戦
東海クB 22―18 名大ク

男女とも初優勝

▼神奈川県高校新人戦(11月・法政大グランド他)

▽男子準々決勝
市川崎工 22―12 日野
一商 14―13 希望ケ丘
磯子工 12―11 慶応
横浜商 20―5 桐蔭

▽同準々決勝
市川崎工 14―8 一商
横浜商 9―7 磯子工

▽同決勝
横浜商 13(9―3, 4―3)6 市川崎工

▽女子準々決勝
北鎌倉 棄権 高浜
市川崎 9―3 生田
東 8―6 京浜横浜
上溝 14―6 日野

▽同準決勝
東 9―6 北鎌倉
上溝 8―5 市川崎

▽同決勝
上溝 9(3―3, 3―3, …, 2―0, 1―0)6 東

三春台ク、堂々の優勝

▼神奈川県秋季選手権(11月・横浜)＝一般男子のみ

▽準々決勝
神奈川教員 18―10 少年工科ク
日本発条 17―11 川和ク
三春台ク 25―11 一商ク
蒔田ク 18―10 日野ク

▽準決勝
三春台ク 22―9 蒔田ク
神奈川教員 17―14 日本発条

▽決勝
三春台ク 19(10―3, 9―6)9 神奈川教員

栃木教員、初優勝飾る

▼第20回栃木県総合選手権(11月・国学院栃木高)

▽男子準々決勝
栃木教員 18―12 AOK栃木
足利工高 8(分)8 烏山高
抽せんで足利工高の勝ち、
国学院高 10―6 矢板中央高
足利工高B 22―10 烏山高B

▽同準決勝
栃木教員 20―9 足利工高
足利工高B 9―8 国学院高

▽同決勝
栃木教員 22(9―5, 13―4)9 足利工高B

▽女子1回戦(3試合)
国学院高 24―1 足利女高

小山城南高 8－4 栃木女高
国学院高B 12－9 小山城南高B
▽同準決勝
小山城南高 13（分）13 国学院高
抽せんで小山城南高の勝ち
国学院高B 22－2 馬頭高
▽同決勝
国学院高B 7（3－2、4－4）6 小山城南高

住友化学、危気なし

▼第27回愛媛スポーツ祭ハンドボール（11月・松山商大）
▽男子1回戦（3試合）
愛媛大 13－12 松山東商
愛媛ク 16－12 愛媛教員
松山工高 11－10 丸善石油
▽同準決勝
住友化学菊本 17－5 愛媛大
松山工高 19－7 愛媛ク
▽同決勝
住友化学菊本 21（13－6、8－5）11 松山工高
▽女子決勝
新居浜商高 6（2－1、4－9）1 松山商高

高校は松山北と新居浜商

▼愛媛県高校新人大会（11月・今治）
▽男子準々決勝
松山北 11－5 新田
新居浜工 13－8 今治南
松山工 8－3 松山東
今治西 20－5 松山商
▽同準決勝
松山北 12－2 新居浜工
松山工 10－4 今治西
▽同決勝
松山北 12（3－7、9－1）8 松山工
▽女子準々決勝
新居浜商 12－3 西条
大州農 7－5 土居
新居浜東 7－6 今治南
松山商 11－4 東温
▽同準決勝
新居浜商 11－3 大州農
松山商 8－2 新居浜東
▽同決勝
新居浜商 9（6－1、3－1）2 松山商

男女とも三本松強し

▼香川県高校新人大会（11月・高松工芸高）
▽男子準々決勝
高松一 11－7 高松商
多度津水産 19－5 高松
三本松 14－5 坂出工
多度津工 11－10 尽誠学園
▽同準決勝
多度津水産 9－5 高松一
三本松 25－6 多度津工
▽同決勝
三本松 8（4－4、4－2）6 多度津水産
▽女子準決勝
高松女商 7－5 高松一
三本松 18－0 観音寺商
▽同決勝
三本松 9（7－1、2－1）2 高松女商

男子で青森ク勝つ

▼第12回青森県下総合室内選手権（11月・青森西高体育館）
▽男子予選ラウンド一般部門
上北ク 22－12 青森教員
青森ク 27－5 弘前大
青森ク 20－11 上北ク
青森教員 31－13 弘前大
上北ク 27－6 弘前大
青森ク 19－10 青森教員
▽同高校部門
県西選抜 18－8 県南選抜
県西選抜 19－9 県中央選抜
県南選抜 24－6 県中央選抜
▽同決勝リーグ
上北ク 14－9 県西高校選抜
青森ク 24－14 県南高校選抜
県南高校選抜 21－17 上北ク
青森ク 20－13 県西高校選抜
青森ク×上北ク、県西高校選抜×県南高校選抜は予選ラウンドの記録を適用
【順位】①青森ク＝初優勝②県西高校選抜③上北ク④県南高校選抜
▽女子（高校）決勝リーグ
青森西 13－5 青森
青森西 5－4 三本木
三本木 8－1 青森
青森西 不戦勝 柏木農
三本木 12－3 柏木農
青森 5－4 柏木農
【順位】①青森西＝4連勝②三本木③青森④柏木農

女子の部7年ぶりに復活

▼鳥取県高校新人戦（11月・米子南商体育館）
▽男子1回戦（1試合）
境 8－1 境港工
▽同準決勝
境 19－10 倉吉東
倉吉工 13－9 倉吉産業
▽同決勝
倉吉工 12（5－6、7－4）10 境
▽女子1回戦（1試合）
倉吉産業 25－2 米子南商
▽同決勝
倉吉産業 8（5－2、3－4）6 倉吉西

女子で1－0の珍記録

▼和歌山県高校新人大会（11月・御坊商工）
▽男子7位決定戦
桐蔭 13－10 市和歌山商
▽同5位決定戦
粉河 7－2 笠田
▽同3位決定戦
那賀 19－2 県和歌山商
▽同決勝
御坊商工 7（3－1、4－2）3 新宮
▽女子決勝リーグ
粉河 12－0 県和歌山商
御坊商工 12－2 新宮
笠田 8－3 貴和
粉河 11－1 笠田
御坊商工 12－2 貴和
新宮 4－1 県和歌山商
粉河 14－0 新宮
貴和 5－1 県和歌山商
御坊商工 15－1 笠田
新宮 1（1－0、0－0）0 笠田
御坊商工 5－2 県和歌山商
粉河 11－0 貴和
粉河 6－3 御坊商工
新宮 2（分）2 貴和
笠田 4－2 県和歌山商
【順位】①粉河②御坊商工③新宮④笠田⑤貴和⑥県和歌山商

春日丘、新人大会で初

▼第24回大阪高校新人大会（11月・三国丘商ほか）
▽男子ベストエイト 泉北、門真、鳳、富田林、枚方、寝屋川、東住吉工、佐野工
▽同準決勝
枚方 7－4 東住吉工
鳳 11－8 泉北
▽同3位決定戦
泉北 9－5 東住吉工
▽同決勝
枚方 14（6－5、8－5）10 鳳
枚方高は3年ぶり2度目の優勝
▽女子準々決勝
大谷 10－4 住吉学園
春日丘 11－6 天王寺
八尾 5－4 枚方
箕面 6－3 初芝
▽同準決勝
春日丘 7－4 大谷
箕面 4－3 八尾

▽同3位決定戦
大谷 13－4 八尾
▽同決勝
春日丘 11（7－2、4－2）4 箕面
春日丘高は初優勝

岩国勢、強味みせる

▼山口県高校新人大会（11月・岩国工高）
▽男子準々決勝
下関工 13－7 徳山
岩国工 13－8 早鞆
下関中央工 11－5 下関一
岩国 12－6 下関西
▽同準決勝
岩国工 8－7 下関工
岩国 13－4 下関中央工
▽同決勝
岩国工 8（4－3、4－0）3 岩国
▽女子準々決勝
徳山 7－5 高水
防府商 11－9 岩国商
岩国 15－5 徳山商
下関西 9－7 山口中央
▽同準決勝
徳山 12－2 防府商
岩国 7－1 下関西
▽同決勝
岩国 4（2－1、1－2、1－1、0－0、0－0）4 徳山
引き分け 抽せんで岩国高の優勝

倉敷商と真備

▼岡山県高校新人大会（11月・津山商高）
▽男子準々決勝
天城 15－3 青陵
児島 14－3 津山商
倉敷商 14－8 津山工
金川 10－6 水工
▽同準決勝
天城 13（延）11 児島
倉敷商 8－6 金川
▽同決勝
倉敷商 12（6－4、6－2）6 天城
▽女子準々決勝（＝1回戦）
井原 6－4 青陵
真備 20－7 落合
金川 14－4 津山
津山商 12－5 岡山女
▽同準決勝
真備 26－2 井原
津山商 9－7 金川
▽同決勝
真備 13（11－2、2－7）9 津山商

自衛隊東京選手権を開催

▼第1回東京都自衛隊選手権（11月、朝霞）
▽準々決勝（＝1回戦）
陸海士官クラブ 18－16 海上ドルフィン
朝霞 24－10 陸上レンジャー
航空ジェット 2－0 十条
三宿 2－0 Eクラブ
▽準決勝
陸海士官ク 12－11 三宿
朝霞 17－14 航空ジェット
▽三位決定戦
三宿 14－4 航空ジェット
▽決勝
朝霞 18（6－8、12－7）15 陸海士官クラブ

釧路協会5周年迎う

▼第2回釧路市（北海道）室内選手権＝釧路協会創立5周年記念行事（12月北海道教育大学体育館）
▽一般男子1回戦（3試合）
全江南 12－11 釧路商OB
鶴陵ジュニア 27－5 自衛隊釧路
釧路工OB 13－11 道教大釧路
▽同準決勝
鶴陵ク 12－8 全江南
鶴陵ジュニア 19－17 釧路工OB
▽同決勝
鶴陵ジュニア 19（8－5、11－4）9 鶴陵ク
▽高校男子1回戦（2試合）
釧路工 19－6 釧路商
白糠 23－20 江南
▽同準決勝
湖陵 21－14 釧路工
白糠 20－8 釧路工専
▽同決勝
湖陵 22（13－5、9－9）14 白糠

堺市が5部門に完勝

▼第4回大阪・堺市×豊中市対抗定期戦（11月・大浜体育館）

堺市		豊中市
一般男子	16－11	
一般女子	11－6	
高校男子	27－17	
高校女子	7－2	
OB	25－17	

中学大会記録

▼名古屋市中学校新人大会（11月・名古屋）参加＝男22、女14
▽男子準々決勝
明豊 5－3 天白
東港 12－6 守山
笹島 23－6 新郊
桜田 18－9 千種台
▽同準決勝
東港 13－12 明豊
笹島 18－7 桜田
▽同決勝
笹島 16（9－3、7－3）6 東港
▽女子準々決勝
猪高 20－3 港南
明豊 9－8 笹島
桜田 19－2 鳴子台
守山 15－6 前津
▽同準決勝
明豊 7－6 猪高
桜田 14－5 守山
▽同決勝
桜田 10（5－2、5－3）5 明豊
▼釧路市（北海道）中学リーグ（12月・釧路）＝男子のみ 参加3
北 19－11 鳥取
鳥取 17－12 共栄
北 13－10 共栄

［注］今月は記事ふくそうのため1月5日以降入稿の記録は次号に掲載します。（編集部）

鹿児島事務局変わる

鹿児島県協会事務局は次の住所に変更された。
▽鹿児島市小川町3の56・鹿児島県鹿児島福祉事務所福祉課（堀之口貞雄）気付。電＝〇九九二―二三―〇一六一。

編集後記

遅ればせながら、一九七三年初の本誌をおとどけします。
本年も種々のことがありましょう。しかし、新年早々、この地球上から、一つの兵火が消えたこと、これは喜ぶべきことでしょう。あまりにも遅すぎたという声はありましょうが、ともあれ良かったと喜べることでしょう。
スポーツと政治・国家、これは良くきく言葉です。スポーツマンには国境はない、これも良く聞く言葉です。しかし、現実はどうでしょうか。世界のトップをめざす大会でどの選手をとってみても、何らかの意味で国の援助を受けているのではないでしょうか。スポーツとはいったい何なのでしょう。もう一度考える必要がありましょう。（F）

日本ハンドボール協会編『ハンドボール』第一〇五号
昭和四十年六月七日第三種郵便物認可 昭和四十八年一月二十五日印刷 昭和四十八年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会 東京都[illegible]区神南一-一-一 電話 大代表(467)三一一一 振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価二百円(年間購読料 千八百円)